

2018年度(平成30年度)事業報告

運営に関する事項

(1) 理事会・評議員会の開催

- 第1回評議員会 5/7 評議員及び監事の選任について(定款第29条決議の省略による)
- 第1回理事会 6/4 平成29年度事業報告及び決算報告についてほか(中京センター)
- 第2回評議員会 6/19 平成29年度事業報告及び決算報告についてほか(ウイングス京都)
- 第2回理事会 6/19 代表理事及び業務執行理事の選任について(ウイングス京都)
- 第3回理事会 11/26 予算の補正, 平成30年度上半期の進捗報告ほか(中京センター)
- 第4回理事会 3/14 平成31年度事業計画及び予算についてほか(中京センター)
- 第3回評議員会 3/29 平成31年度事業計画及び予算についてほか(中京センター)

(2) 人事交流

- (公財)京都市国際交流協会と7年目の人事交流になるが, 諸事情により休止とした。
- (公財)よこはまユースに1年間職員1名を出向させた。
- NPO法人TEDIC(宮城県石巻市)に2年間の契約で職員1名を出向させた。

(3) KES認証の継続

- 2008(平成20)年5月に受けたKES(ステップ1)の認証を継続(確認審査合格)し, 環境負荷の軽減を意識した法人・施設運営に努めた。
- KES認証を生かした施設運営を行うとともに, 若者や地域への啓発的活動を進めた。確認審査では, 環境意識の充実と外部発信については各現場で工夫が見られ, ロビーやSNS等を活用し, 積極的に発信しているとのコメントをもらった。
 - 節電, 節水, 紙の節減など, 職員への徹底と利用者への呼びかけ
 - 環境改善目標の実現
 - *環境意識の充実と外部発信(毎月1回以上)／センター周辺の清掃(毎月1回)
 - *環境啓発事業の実施(年間で7回)
 - 祇園祭ごみゼロ大作戦に協力

(4) ディーセントワークへの取り組み

- 2016年度のディーセントワークタスク報告を受けて, そこで指摘・提案された点への具体的対応を検討した。
- 並行して懸案となっていた, ハラスメント防止のためのアクションプラン作りと重なる点も多いため, 「ディーセントでハラスメントを起こしにくい組織づくり」につなげる, アクションプラン策定と事務局トップによる「取組宣言」を準備した。

(5) 設立30周年記念パーティの開催

- 開催日: 7月25日(水) 午後6時30分～9時
場 所: 京都ホテルオークラ「暁雲」
出席者数: 123名(来賓含む)
感謝状贈呈: 山科青少年活動センター運営協力会／三洋化成(株) (東山青少年活動センター運営協力会企業)／松井 憲昭氏(京都新聞洛南販売所会長)／江田 努・薫氏(若者サポーター／ボランティア)／中島 美里氏(事業参加者の保護者／式典に参加できないので後日郵送)

I. 協会(本体)事業

京都市からの補助金及び協会自主財源を原資として以下のように実施した。

1. ネットワーク形成事業

若者の成長を支援する様々な団体や機関の活動が、有機的につながることを目的として下記に取り組んだ。

(1) 若者に関わる機関・団体・人のネットワーク形成と連携を拡げる事業

① 若者に関わる団体の交流・情報交換の場づくり (京都市補助事業)

- 教職員向けの「パイロット版・教員向け社会貢献教育研修」を実施した。(8月10日)
- 活動報告・団体交流会を実施した。(2月2日)

② 外部機関・団体と構成する実行組織への参画(自主事業)

- NPOセンター・ユースビジョンと協働して「学生Place+」を運営した。
- 健康長寿のまち・京都市民会議に委員として参画した。
- 京都はぐくみネットワークに参画した(幹事/各区実行委への参加)。
- チャイルドライン(こども電話)に協力した(共催・理事派遣)。
- 「AIDS 文化フォーラム in 京都」運営委員会に参加した。
- 京のアジェンダフォーラム(会員)
- 京都府レクリエーション協会(団体加盟/評議員派遣)

③ 青少年育成・支援団体との事業共催・後援 (京都市補助事業含む)

- 育成団体・外部機関・関係団体からの希望に応じて名義共催, 協力を行った。

< 共催事業 >

事業名	主催
「映画吹替ワークショップ」	特定非営利活動法人キンダーフィルムフェスト・きょうと
チャイルドライン京都事業	特定非営利活動法人チャイルドライン京都
第18第受け手ボランティア養成講座	特定非営利活動法人チャイルドライン京都
「みんなの学校ごっこin東山2018」	京都市東山いきいき市民活動センター
第3回 いっぽねっと交流会	求職困難者就労支援ネットワーク「いっぽねっと」
子ども映画教室	特定非営利活動法人キンダーフィルムフェスト・きょうと
下京健康ビンゴ	下京区役所
チャイルドライン京都ボランティアインターン研修	チャイルドライン京都
CaféLGBT+presents たたかうLGBT&アート第4弾	CaféLGBT+
京都Breakers Session	京都Breakers Session
ユースワーカー養成講習会	名古屋市青少年交流プラザ
山科未来ファミリーホーム	山科未来ファミリーホーム
むすぶネット交流イベント	学生Place+
京都ユースフォーラム 2019	学びの森 フリースクール

< 後援事業 >

事業名	主催
小倉ユウゴ 5th Anniversary Concert “ハイウェイ”	小倉ユウゴ
京都やんちゃフェスタ2018	京都市育成推進課
現代国際巨匠絵画展	花園ジョイフル子ども会
「家族のつむぎ直し」 ～家族両方から、そのヒントを考える～	東山区「不登校・ひきこもりを考える親の会」 “シオンの家”

④関係行政機関・関係団体への協力(協力事業)

外部機関・団体との連携・協力を行った。

○行政機関, 他団体に委員等を派遣した。(主な市関連/市教委関連/他公益団体関連)

- *京都市はぐくみ推進審議会(委員)
- *京都市子どもを共に育む京都市民憲章推進協議会(委員)
- *京都市児童生徒登校支援連携協議会委員 *京都市多文化施策審議会(委員)
- *京都市HIV感染症対策有識者会議(委員) *エフエム京都放送番組組審議会(委員)
- *京都市児童館学童連盟(理事) *京都府レクリエーション協会評議員

○外部機関・施設などからの依頼に応じて, 企画提供や講師派遣などの協力を行った。

内容・テーマ	派遣先・依頼元等	実施日
生徒会リーダー研修/チャレンジ体験準備講習	京都市立桃山中学校	4~10月
「お互いのことを知る」「話すきっかけをつくる」	京都花園高校	4/16
「山科の若者の育ちを支える取組み」	京都橘大学	5/10
若者支援とユースサービス	洛北ロータリークラブ	5/11
若者の育ちを支える取組み ~ユースワークの現場から~	大阪教育大学	5/11
社会教育演習/春学期 青少年活動センターの実践	佛教大学	6/28
社会福祉調査法 I	佛教大学	6/28
社会貢献教育事業 NPO で働くことについて	京都府立嵯峨野高等学校	7/13
子ども若者支援事業の取組について講義	神戸松蔭女子学院	9/11
社会貢献教育の取り組みについて	高島市	9/26
就労支援機関の紹介・働く目的について	第一学院高等学校	9/28
就労支援機関の紹介・働く目的について	京都つくば開成高等学校	10/4 12/14 2/8
社会教育実習	京都女子大学	10/15
京都市ユースサービス協会の取組について	思春期の子育てに悩む親の会	10/20
サポステの取組について	京都市パトナ相談研修	10/26
若者学 就職をテーマに, 働くことについて考える	立命館大学	11/2
不登校フォーラム全体会パネラー	京都市教育委員会	11/4
みんなでつころう! 山科未来ファミリーホーム	山科未来ファミリーホーム	11/25
社会教育演習/秋学期 青少年活動センターの実践	佛教大学	11/27
社会福祉実習	同志社大学	11/30
ユースワーカー養成講習会	名古屋市ユースクエア	12/1~2
学生スタッフ研修	同志社大学ボランティア支援室	12/6
平成30年度西京区地域福祉推進シンポジウム ~“子どもから育み”から広げる地域共生の輪~	西京区社会福祉協議会	12/8
「京都市における子ども・若者支援事業」取組報告	京都市子ども若者はぐくみ局	12/10, 14
青少年活動センター役割について	児童養護施設 積慶園	2/22
つながるためワークショップ	京都いのちの電話	2/24

○少年非行の減少や軽減につながる取組での連携

- *スクールサポーターの活動に協力する(センターを使った少年との面談及び学習指導※北・中京・山科)とともに, 非行少年の立ち直り支援活動(北:地域清掃)の場を提供した。

(2)若者に関わる情報の受発信事業（京都市補助事業）

若者や若者支援にかかわる団体、市民を対象としてその取り組みや関わる人・団体について情報の受発信に取り組んだ。

○ボランティア情報の発信

*ユースアクションプラン認証事業と連動させWEBでボランティア情報を発信、紙媒体としてボランティア特集号(3月)を発行した。

*大学等、ボランティアガイダンスへの参加・広報活動を行う。

○広報誌「ユースサービス」の発行。

想定する読者は18歳以上の人。各事業所と連携した企画・取材を取り入れて記事内容の充実を図った。

第31号～第33号を発行(4,000部)し、関係団体や個人、学校、大学他公共施設・機関に配布した。

*第31号/9月号 特集「若者×らしさ」 *第32号/1月号 特集「若者×つながる」

*第33号/4月号 特集「若者×NEXT10years」

2. 市民参加促進事業

青少年が「市民社会」の主体となる“市民”としての経験・学習の機会提供を目指す事業。シティズンシップ事業の開発、仕組みづくりに取り組んだ。

(1)シティズンシップ教育につながる事業の実施

○協会独自のシティズンシップ教育事業の開発・実施

企画委員会シティズンシップタスクグループによる自主活動支援の事業整理と、その意義を伝えるツールづくりの検討に取り組んだ。

○社会貢献教育事業の開発・実施

日本ファンドレイジング協会、京都地域創造基金、他のNPO等と連携して、京都すばる高校・嵯峨野高校にて社会貢献教育事業を実施した。

(2)ユースカウンシル設置運営

○若者からの視点で継続的な政策提案や市政参加ができる仕組みづくりとして合宿、ミーティング、立上げのためのプレイベントを実施した。

3. 担い手育成事業

ユースワーカーの資格化をすすめ、ユースサービスの同業者間連携と、社会的認知が広がることを目指す。また、ユースワークの現場体験を通してユースサービスの理解者が育つとともに、若者と関わる活動の人材育成が行われている状態を目指す。

(1)ユースワーカー養成(資格認定)事業

○修了者 1名

○新規 6名（横浜や名古屋など、市外での講習会実施後に資格コースへの申し込みがあった。）

(2)インターン受入れ/ボランティア育成・研修事業

①実習生/インターンシップ受入れ・指導事業

○立命館大学(シチズンシップ・スタディーズ I):北 13名

○大学コンソーシアム京都:北 1名, 事務局 1名, 下京 1名

○立命館大学全学インターンシップ:北 4名, 中京 1名, 下京 2名, 南 2名, 伏見 1名

○京都女子大学インターンシップ:中京 2名, 南 2名

○京都橘大学インターンシップ:山科 1名, 下京 1名, 南 1名

○京都女子大学社会教育実習:東山 1名, 下京 1名

○京都女子大学社会教育基礎実習:東山 1名

○協会独自インターンシップ:東山 1名(有償), 中京 1名

②ボランティア育成・研修会等の実施

○学習支援ボランティアを対象に年4回の研修会と交流会を実施

○協会登録ボランティアを対象に30周年の御礼の場、『ボランティア感謝祭』を実施した

4. 調査・研究事業

新たな事業展開の機会をつかみ、社会的要請を先取りするため幅広い調査・研究活動を行う。

(1) 立命館大学との共同研究(ユースワーカー養成／若者学研究)

①ユースワーカー養成に関する立命館大学との共同研究

○アカデミックベース強化、資格制度作りに向けた研究協議を継続して行った。(定例研究会3回実施)

*共同研究メンバー

(立命側)野田正人氏・荒木寿友氏・小西浩嗣氏・中村 正氏・斎藤真緒氏 (協会側)水野・横江・竹田

○「若者学研究会」を開催した。立命大の学生・院生を中心として6人程度で実施。図書館企画として「若者学の入り口 Youth studies@ぴあら」を共同開催し、「非モテ」「家族」「働く」など複数テーマについて議論した。

○ユースワーカー養成の在り方の検討

*外部研究者の研究チーム(以下)に参画しワーカー養成の在り方についての研究を進めた。

②ユースワーカー養成プログラムの実施に関する立命館大学との共同研究

○大学院(応用人間科学研究科)でワーカー養成コースを共同運営した。

(概論) 5人受講／(演習・実習) 3人受講 山科+中京(1人)・伏見(2人)センターで実習を行った。

○「ユースサービス概論」を開講(立命館大学と共同)した。

(2) 外部機関・団体・研究者等との共同研究

○「若者援助・政策とユースワーク研究会」(平塚真樹法政大学教授を代表とする科研費研究)に継続参加。

*ヨーロッパ研修に参加、エピソードをもとにしたユースワークの価値説明をテーマとする研究協議に参画した。成果は研究報告書及び電子書籍(2019年5月発刊)にまとめられる。

○子ども若者支援専門職員養成研究への協力

*奈良教育大の生田教授を代表とし社会教育研究者による研究会に参画(研究協力者)した。ユースワーカー養成にかかる『ワークブック』を作成・発刊した。

(3) ユースワークの全国での展開基盤強化(4団体協議)

○5団体会議

*ユースワークを実践する5都市の団体で、現場実践者のエンパワメントにつながる専門職団体(ユースワーカー全国協議会)作りに向けた検討を進めた。

<構成団体> (公財)さっぽろ青少年女性活動協会／(公財)よこはまユース／NPO法人こうべユースネット
名古屋市青少年交流プラザユーススクエア共同運営体／京都市ユースサービス協会

*ユースワークの共通価値・目標の整理、ワークブックの作成、各地でのワーカー養成講習を行った。

5. 新たな社会的ニーズに対応した事業の展開

新たな事業展開の機会として、社会的要請を先取りするため幅広い調査・研究活動、仕掛けに取り組んだ。

(1) 企画委員会とで試行された企画や、調査研究で明らかになったニーズに対応する取組の具体化

○「若者と食」関連プログラムの実施。

(2) 子ども若者ケアラー関連事業

○ヤングケアラー(協会では子ども若者ケアラーの言葉を使う)事業プロジェクト

*10代・20代で家族等のケアの主要な担い手となっているケアラー(=子ども若者ケアラー)を巡る問題について、外部関係者とのプロジェクトの事務局を担い、事例検討会、当事者グループの運営サポートを行った。

<プロジェクト> 代表 斎藤真緒氏(協会企画委員)・濱島淑恵氏(大阪歯科大学准教授)

(3) セクシュアルヘルス関連事業

○担当者会を設置し、エイズデー等での啓発活動や大学での出張講座、職員研修を実施した。

6. 事業開発の取り組み

協会事業が、社会的要請に応え、先取りをしたものであり続けるための仕掛けとして取り組む。

(1) 企画委員会と協働して各分野における事業の質的な深化・展開を目指す

○協会の新たな事業課題への取り組みの在り方について、以下の3つのタスクグループ(2年任期)を作り、現場ワーカーも含めて検討した。

- ①若者と家族 ②若者とSNS ③若者のシティズンシップ形成

<委員会の開催>

月 日	内 容	検討事項・作業詳細
5月25日	全体会	理事会での中間報告に向けた協議
11月9日	全体会	企画委員会の持ち方について検討
随時	各タスク	3タスクそれぞれでテーマについて議論、分析、事業試行に取り組んだ

<企画委員一覧>

斎藤 真緒	立命館大学産業社会学部教授	幸重 忠孝	幸重社会福祉士事務所代表
川中 大輔	シチズンシップ共育企画代表	山本 卓司	京都市教委生涯学習部首席社会教育主事
石山 裕菜	京都橘大学助教	岡部 茜	大谷大学講師

(2) マイノリティの若者を巡る問題への取組を試行する

○若者まいのりていギャザリング

マイノリティ(社会的弱者・生活困難者・周縁化された人・生きづらさやしんどさを感じている人等)をエンパワメントしより生きやすい地域・社会づくりを可能する場として実施した。

(3) その他のプロジェクト

○SDGsについて、チーフ会にて京都市の施策を統括監からレクチャーいただき意見交換を行った。

7. NPO等民間団体の子ども・若者支援促進事業 (再掲)

NPO等民間団体の支援事業に対して、助成を通じ支援活動を促進するとともに、指定支援機関とNPO等民間団体、NPO等民間団体相互の連携・協力の機会を設定した。

○7団体の事業について採択、助成した。

京都ARU/京都教育サポートセンター/恒河沙母親の会/エイドネット cafe/若者と家族のライフプランを考える会/京都老人福祉協会 就労継続支援A型 ワークパートナー YUI/東山区「不登校・ひきこもりを考える親の会」「シオンの家」

8. ディーセントな組織づくり(事業運営にかかわる組織マネジメント)

(1) ディーセントな組織づくり

○職員での検討チームによるアクションプラン策定に向けた検討を進めた。

*ハラスメント対応のアクションプランと併せる形での対策プラン化を検討し、理事会に素案を提示した。

○☆メンター制度の導入(5月～3月末まで)

新規採用職員11名に対し、ユースワーカーとしての業務を行う上で抱える葛藤や直面する課題、迷いなど相談できる体制を整えた。メンターは5年目から10年目程度のチーフを中心とする職員が担った。

○職員がコンサルテーション・スーパーバイズを受けられる制度を年間運用した。

*山本智也氏(大阪成蹊大学教授)に委嘱した。

*年間15回実施。ワーカーの幅広い悩みや課題について、コンサルティングを行った。台風などの災害で中止になった回もあったが、コンサルタントに臨機応変に対応していただき、予定回数の実施ができた。

(2) 戦略的な広報の取り組み(広報室の運営)

○広報室を核として、協会及びユースサービスの「ファンを増やす」取り組みを進めた。

若者向け広報:学校訪問/不動産連携によるポスティング/HPの充実

一般・支援者向け広報:利用促進ちらしの作成の頒布/SNS広告の実施/プレスリリースの発行

職員向け: 広報研修の実施

- 広報の全体調整
広報データの更新・管理 / 協会広報物の全体調整 / 事前・事後告知(プレスリリース)
YAP認証事業やイベントガイドの活用 / 利用促進に関わる取り組みの企画実施

(3) 研修室による職員研修の組織的・計画的運営

年間研修計画の設定と、それに基づいた研修を実施した。

- 新採職員研修の実施(職員・ワーカーとしての基礎, グループワーク・相談研修, 実践記録を作成しスーパーバイズを受ける等) / 対象11名
- 若手職員研修の実施(対人援助における聞き方(聴き方)の基礎, カウンセリングの基礎) / 対象19名
- 外部研修の希望を集約し研修の機会を提供した。
(学会, キャリアコンサルタント研修, ボランティアコーディネーター養成講習会等) / 16件
- 普通救命講習(AED研修)の実施(12月7日)
12月7日南センターにて実施 / 参加者数17名
(中京センターは別に京都市男女共同参画推進協会と共同で1月9日, 23日に実施。参加者数:25名)
- チーフ管理職向けのハラスメント研修の実施(2月25日)
講師: 三木 啓子氏(アトリエエム株式会社代表取締役), 参加者数:16名
- 職員全員が参加する全体研修を開催した。(6月6日(水)下京センターで開催)
平成28年から実施してきた「若者調査」結果報告 / 30周年事業NEXT-10Yearsワークショップ等

(4) 事業評価の実施

- 事業評価のサイクル(目標設定→評価→枠組みの再構成と計画への反映)を業務の中に位置づけた。
- 「外部評価者」の参画を得て評価会議を行い, 事業所間・ワーカー間の相互評価とともに外部の視点を事業の捉え方に反映させた。

9. 環境負荷の少ない団体・施設運営(再掲)

職員の環境意識が高まり, 環境負荷の少ない施設運営ができること, 利用者や地域住民に外部発信や環境啓発事業を行い意識の高まりがある状態を目指す。

(1) KES認証の維持

KES認証を生かした施設運営を行うとともに, 若者や地域への啓発的活動を進めた。

- 節電, 節水, 紙の節減など, 職員への徹底と利用者への呼びかけ
- 環境改善目標の実現
 - * 環境意識の充実と外部発信(毎月1回以上) / センター周辺の清掃(毎月1回)
 - * 環境啓発事業の実施(年間で7回)
- ごみゼロ大作戦に協力(2) 関連事業の実施

10. 協同事業(協会設立30周年記念事業)

協会が設立されて30年目の節目に当たり, 記念事業を実施した。

(1) 記念事業の企画実施

- 7月に記念式典・パーティを実施した。(再掲)
- 今後10年のビジョン(NEXT-10Years)策定に向けて, 中間まとめを作成した。
- 記念誌は30周年事業の報告も合わせて掲載するため次年度に発行予定。
- ユースワークを伝える映像作成については, 職員へのアンケート実施に留まった。

(2) 関連事業の実施

- ユースシンポジウム2018において記念の取り組みを行った。
- 若者文化発信事業「ユスカル」を記念事業として行った。
- NEXT-10Years関連の取り組みを多面的に行った。(職員向けワークショップ(合宿型を含む), ユースシンポジウムでのテーマ設定, ユスカル来場者へのヒアリング)

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者／のべ数	備考／実施場所等
若者マイノリティギャザリング	6/24	1	66名	下京センター
ユースカウンスル スタッフ合宿	7/14~15	1	7名	宇多野ユースホステル
ユースカウンスル プレイベント	3/10	1	16名	中京センター
ネットワーク形成事業／教職員向け研修	8/10	1	6名	中京センター
ネットワーク形成／団体交流会	2/2	1	18名(12団体)	中京センター
若者学の入り口@びあら	11/2	1	19名	立命館大学
事業評価ヒアリング	1/14	1	44名	中京センター

Ⅱ. 子ども・若者支援事業及びその他受託事業

1. 京都若者サポートステーション受託事業（厚生労働省及び京都市委託）

無業状態の15歳から39歳までの学籍のない若者（※一部例外あり）に対し、職業的自立に向けた支援を行う同事業を厚生労働省及び京都市より委託を受け、運営した。全国的に有効求人倍率の上昇、完全失業率の減少という状況ではあったが、昨年度よりは新規登録者数・就職者数ともに増加した。一方で、就職に遠い層の登録も多く就職するまで時間が掛かるケースが増えてきている。

(1) 個別相談支援事業

① インテーク面談

○ユースワーカーがインテーク面談を実施。特に、緊張感が高い利用者に対して関係作りをしながら思いを整理し、事業とのつなぎの面談や専門相談を保管する形で個別相談など、間をつなぐための支援に取り組んだ。

② 専門相談・個別支援

○専門相談員である臨床心理士によるこころの相談（水・木・金曜）、キャリアコンサルタントによるキャリアの相談（火・金・土曜）。

③ 定着・ステップアップ支援

○就職者数の微増の影響もあり相談件数は増加している。就労決定後の様子伺いや継続的なかわりと、途切れない支援を行った。

(2) 就活基礎力

① イマココ

○マインドフルネスの手法を用いて、今ここの自分自身の状態を客観視しつつ、心身のリラックスを体感し、緊張緩和するプログラムを実施。

② キャリコロ

○サイコロの出た目に合わせた話をし、徐々に少人数から全体に繋げ、会話力アップを目指すプログラムを実施。アドバンスでは、キャリコロのような題目設定をせずに、全体で話す体験をする。また、参加者の意見を取り入れ、女性限定の「女子会」や職業体験参加者の体験談を聞く「座談会」など、さまざまな形式で実施。

③ 身体表現を用いたコミュニケーションワーク（インプロ）

○演劇から学ぶ、働くためのコミュニケーションワーク（山科）では、インプロビゼーション（即興演劇）の手法を用いて、表現することを体験的に学ぶワークを実施。また、即興でのダンスの手法を用いて、表現することを体験的に学ぶ、じぶんみがきダンス（東山）も実施。いずれも、ワンデイ（体験）を設定し、登録者がより参加しやすい環境を整えた。

(3) 就活実践力

① チートレ

○月1回の発送作業において、役割分担し作業する体験を通して、協働で働くことを体験的に理解し、実践できるための事業、チートレ（チームワークトレーニング）を実施した。また、協会の発送作業を手伝うなど新しい取り組みも始めた。

② 自分を知って仕事に就こう

○過去の経験や現在の自己イメージを明確にし、将来ビジョンを作成し、実行可能なキャリアプランを作成する講座を実施。

③ 面接対策講座

○模擬面接の様子を映像でふりかえる作業を通して、面接の所作を学ぶ講座。面接で想定される質問に対する回答を考えたり、履歴書の書き方について、特に志望動機・自己PRを作成する際のポイントを学ぶポイントを学んだりする2つの講座を実施。

(4) 就業体験事業

① ゆず加工体験

○水尾地域において、特産のゆずの加工に携わる5日間の就労体験を実施。

② アジプロ「喫茶・事務体験」

○青少年活動センター内での就労体験プログラム（南＝喫茶、下京＝事務）を実施。丁寧に体験をふりかえるプロセスを踏むようにしている。

③職場体験

- 青少年活動センターでの職場体験を実施。いずれのケースも受け入れ体制や丁寧なふりかえりを行い、次のステップへと進んでいった。また、新規受入れ先として、病院(デイケア、事務など)、老人福祉施設、喫茶での製造・販売など新規開拓ができ、実際の体験、就労にまで至るケースもあった。

(5)保護者支援事業

①親こころ塾

- 無業状態の我が子との関わり方について悩む保護者が、捉え方・かかわり方を学ぶプログラムを実施。

(6)サポステ周知事業

①地域出前相談会

- ハローワーク京都七条での出張相談を毎月実施。また、京都産業大学との連携による出前相談を平成30年度は卒業式に併せて3日間(9月卒業/3月卒業)実施。卒業後進路未決定者が参加した。また、通信制高校にて講話も実施した。

②広報事業

- 従来のパンフレット・チラシ送付、HP/サポステネットでの広報を実施。各種ネットワークでのサポステ紹介依頼が多く、ネットワークを通しての広報も精力的に取り組んだ。

(7)機関連携事業

①内部連携

- サポステの危機的な状況を発信し対策として提案をいただいた。今後も協会としてセンター/子若/サポステと連動した広報の取り組みの必要性が求められる。

②学校連携(大学・高校)

- 前述しているが、京都産業大学、通信制高校での出前相談会を実施。進路未決定で卒業予定の生徒や中退者への支援のため、市内4校(1校は青少年活動センターより訪問)に訪問、通信制高校は7校全てに訪問した。また、大学においては、私立大学就職懇話会に参加しサポステのことを発表した。

③他機関連携(就労・福祉・医療機関/企業/ネットワーク)

- 就労移行支援事業所ネットワークでのサポステ紹介や各福祉機関と個別に連携を前提とした相互の取り組み理解のための協議に取り組んだ。また、中小企業家同友会・各支援機関との連携による、ネットワークに参加。サポステ対象層と中小企業とのマッチングから企業での実習、就労に繋がった。

(8)常設サテライト

①常設サテライト運営

- 個別相談支援/就活基礎力/サポステ周知/機関連携、出張相談等の事業を実施。また、ネットワークに積極的に参加し、情報共有の機会を有効に活用する他、具体的な連携を模索した。

②常設サテライトにおけるプログラム実施

- 前述の就活基礎力、就活実践力を元にしたプログラムの実施を行った。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者・のべ数	備考/実施場所等
身体表現を用いたコミュニケーションワーク	6月/2月 9~10月/2月	15	97名	山科センター/東山センター
キャリコロ(アドバンス/女子会/就労体験談含む)	4~3月	31	242名	
イマココ	4~3月	12	132名	
自分を知って仕事に就こう	8~9月/2月	8	65名	
面接対策講座「かたちを学ぶ」,「内容を深める」	4~3月	11	36名	
チートレ	4~3月	15	56名	
アジプロ(喫茶体験)	7~8月/11~12月	14	42名	南センター
アジプロ(事務体験)	3月	6	24名	下京センター
ゆずしぼり体験	11~12月	6	10名	水尾地域
親こころ塾	2~3月	3	56名	

2. 子ども・若者総合支援事業(指定支援機関受託業務)

子ども・若者支援地域協議会において、支援の主導的役割を担う指定支援機関として、関係機関と連携のもと社会生活を円滑に営む上での困難を有する子ども・若者の社会的自立に向けた総合的な支援に取り組んだ。また、中京青少年活動センターの子ども・若者総合相談窓口と子ども・若者支援室の機能を以て、ひきこもり地域支援センターとして位置づけられている。

(1) 個別ケース支援(支援対象者等に対する相談、助言、指導及び支援の進行管理)

総合相談窓口や関係機関からリファーされた支援地域協議会による支援を必要とする対象者に対して、支援コーディネーターが相談、助言、支援のコーディネート及び進行管理等を実施。対象者の状況に応じて、住居やその近隣の施設などへのアウトリーチの方法も用いて支援を行った。

- 支援ケースは98ケース(前年度からの継続:77ケース, 新規:21ケース)。昨年度から新規, 総数ともに減少。
- 支援を始めて6ヶ月経過した23ケース中, 10ケースが状態の変化が見られる。状態変化の割合は56.0%から43.5%に減少。
- 支援ケースの約7割がひきこもり区分であり, 依然として高い数値。本人に出会えない状態から始まるケースが半数以上で増加傾向。
- 本人支援のためのアウトリーチは, 70ケース160回(うち家庭訪問は8ケース62回)実施。ケース数, 回数ともに増加。

(2) 支援地域協議会との連携

必要に応じて, 個別ケース検討会議を実施するほか, 地域協議会に設置された課題別検討部会(ひきこもり支援チーム)における検討等を通して, 構成機関と連携しながら, 支援を行った。

- 個別ケース検討会議を53ケース, 延べ435回実施(前年度は54ケース, 延べ458回)。ケース数は横ばいだが, 実施回数が減少。
- 代表者・実務者会議(2回)とともに, 課題別検討部会を3回実施。事例検討を実施。

(3) NPO等民間団体の子ども・若者支援促進事業の実施 及び 関係機関・団体との連携

NPO等民間団体の支援事業に対して, 助成を通じ支援活動を促進するとともに, 指定支援機関とNPO等民間団体, NPO等民間団体相互の連携・協力の機会を設定した。

- 7団体の事業について採択, 助成。(再掲)
京都ARU/京都教育サポートセンター/恒河沙母親の会/エイドネット cafe/若者と家族のライフプランを考える会/京都老人福祉協会 就労継続支援A型 ワークパートナー YUI/東山区「不登校・ひきこもりを考える親の会」“シオンの家”
- 「講演会+NPO活動紹介・交流会」(タイトル:「ひきこもる若者にできること一周囲の変化から本人の変化へ」, 講師:船越 明子氏)を実施(2018年12月9日)。定員170名を上回る188名が参加。交流会には助成団体のうち7団体に加え, 京都市社会福祉協議会, 親子支援ネットワーク♪あんだんて♪が出演。講演会, 交流会とも非常に好評であった。

(4) 協会内部資源の活用・連携

子ども・若者総合相談リンク機関として位置づけられている「若者サポートステーション」, 「青少年活動センター」と, 総合相談窓口・支援室とが密接に連携し, 子ども・若者の総合的な支援に努めている。

- 総合相談窓口, 支援室それぞれのスーパーバイズをオープン化。各センター, サポステから職員が出席し, 連携を図った。
- 若者サポートステーション, 青少年活動センターからの紹介による子ども・若者, 家族, 機関の相談:12件
- 青少年活動センター, 若者サポートステーションのユースワーカーからの相談:36件
- 相談窓口における, 若者サポートステーション・青少年活動センターへの紹介:67件
- 支援ケースにおける, 青少年活動センター・若者サポートステーションとの連携数:34ケース, 延204回

(5) ピアサポーター養成・派遣事業

昨年度に引き続き, 支援コーディネーターとともに, 対象となる子ども・若者の社会的自立に向けた支援に協力する「ピアサポーター」の養成派遣を実施した。

- ひきこもり支援専門委員会において, 他機関・団体とともに現状についての情報共有, ピアサポーター養成プログラム実施, ピアサポーターの派遣について検討した。
- ピアサポーターミーティングを月1回継続。活動の振り返りや検討, ニーズに応えた形での研修を行った。
- ミニグループ活動(モノタメ:ものは試しの略)を月1回実施。

- ピアサポーターの派遣は3ケース、延べ7回(ケース数・回数ともに減少)
- 養成講座実施回数 4回, 修了者数 4名, 登録者数 3名(30年度未登録者数 13名)

(6) 子ども・若者総合支援機能の発信

視察対応, 外部での講演等の機会を通じて, 子ども・若者総合支援とユースサービス協会全体の機能について広く発信に努めた。

- 子ども・若者総合支援に関する視察・調査対応:7件(前年度:7件)
- 外部発表・出展:29件(前年度:29件)

(7) 京都市ユースアクションプラン認証事業

青少年育成団体やNPO団体などが実施する, 子どもから大人へと成長する青少年を支援する取組に対して, 「京都市ユースアクションプラン」の主旨に基づくものを京都市が認証し, 情報の集約・発信を通じた活動の促進, 青少年への情報提供を行った。

- ユースアクションプランの趣旨に合致する取り組みの事業申請募集を行った(認証事業178件)。
- ユースアクションイベントガイド夏休み号(30,000部, 約350か所に配布)と, ボランティア特集号(10,000部, 500か所に配布)を発行した。
- WEB版のユースアクションプランイベントガイドを毎月更新し発信した。

(8) 総合相談窓口事業(青少年活動センター指定管理業務)

「子ども・若者育成支援推進法」に規定されるワンストップ窓口として, 「子ども・若者総合相談窓口」を中京青少年活動センター内に設置しており, 社会生活を円滑に営む上での困難を有する子ども・若者やその家族からの相談に対応した。また, 平成25年度より, 「ひきこもり地域支援センター」の相談窓口としても対応している。

- 新規相談は, 539件。前年度(488件)より増加。
- 上記新規相談のうち, 本人からの相談は128件(23.7%)であった。相談内容は「ひきこもり」が35.4%と最も多く, その他にも多様な相談を受けている。
- 年代別では, 10代が29.5%(前年度:25.4%), 20代が47.3%(前年度:43.8%), 30代が16.7%(前年度:21.7%)であった。

3. 中学生学習支援受託事業（京都市子ども若者はぐくみ局子ども家庭支援課）

家庭での学習環境が整いにくい中学生等を対象とした学習支援事業を実施。大学生を中心としたボランティアによる原則マンツーマンで学習支援にあたった。場づくりや運営が安定するよう、青少年活動センター以外の拠点にはコーディネーターを配置した。新たに醍醐支所での学習会を立上げ、18拠点となった。

(1) 実施回数＝延べ878回

	登録実数	延べ参加者数	夏休み学習会(延べ)
学習者	321人	4,393人	61人
ボランティア	276人	5,116人	81人

<各地域での実施状況>

Co.=コーディネーター Vo. =ボランティア

実施場所	参加者 (登録者)	ボランティア 及びスタッフ	実施曜日	実施の枠組み
北青少年活動センター	19	17	毎週木曜日	BBS会の協力
伏見青少年活動センター	28	19	毎週木曜日 下半期月曜	単独運営
山科青少年活動センター	32	12	毎週金曜日	単独運営
南青少年活動センター	17		毎週木曜日	単独運営
洛西(コワーキングスペース)	26	12	毎週金曜日	下京センターがボランティアをコーディネート。Co:地域団体に依頼
中京青少年活動センター	23	23	毎週金曜日 下半期火曜	学習支援団体Apolonの協力
小栗栖(こどものひろば事務所)	6		毎週火曜日	山科醍醐こどものひろばの協力
右京(山之内社会福祉会館) ※野菊荘の会場提供協力	18	25	毎週木曜日 下半期火曜	花園大学社会福祉学部の協力 Co:花園大学教員 ※7月から実施
左京(左京区役所)	22	12	毎週金曜日	京都ノートルダム女子大学他の協力 Co:京都府立大学 院生
深草(龍谷大学町家キャンパス)	23	24	毎週木曜日	龍谷大学の協力 Co:龍谷大学 学生2名
西京(西京児童館)	18	11	毎週金曜日 下半期月曜	京都市社会福祉協議会の協力 (会場借用)
東山青少年活動センター	15	34	毎週金曜日	地域団体と協力 Co:子どもの居場所「かもかも」
醍醐(カフェ「トハウス」)	4	10	毎週木曜日	山科醍醐こどものひろばの協力
下京青少年活動センター	8	13	毎週月曜日	単独運営
上京(上京区役所)	17	13	毎週月曜日	単独運営 Co:同志社大学卒業生
右京南部(京都光華女子大学)	9	8	毎週木曜日	京都光華女子大学の協力 Co:立命館大学 院生
向島(城南保育園)	15	11	毎週土曜日	伏見区社会福祉協議会の協力 Co:ボランティア.経験の学生2名
醍醐支所	21	10	毎週月曜日	7月スタート、支所内プロジェクト 山科醍醐こどものひろばの協力

* 青少年活動センターで実施する学習会の運営詳細については、各青少年活動センターにおいて記載。

* 中学生の受験が近づく秋以降、4拠点の学習会で他の曜日にも実施した。

(2) 「夏休み学習会」の実施

長期休暇中の学習機会として実施した。

○市内5拠点、計13日間実施。

(3) ボランティア説明会

計5回ボランティア説明会を実施した。また、説明会以外に個別でのボランティア説明も対応し、各拠点につないだ。年間通じて、ポータルサイト等からの問い合わせが断続的にあった。

(4) ボランティア研修・交流会

各回の振り返りを重視し毎回実施しているが、それ以外にも拠点別に研修や交流会を企画実施した。

拠点を越えた全体の研修と交流会については、コーディネーターと学習会ボランティアを対象に、今後の活動や自身のスキルアップとなるような研修と拠点を越えた新たな仲間との出会いの場の交流会を2部構成で年4回実施。第1回目は「コミュニケーションワーク」と座談会を実施した。(9/16、北青少年活動センターにて、18名参加) グループワークを実際に体験しながら学ぶことで、自然と交流がうまれ楽しい雰囲気の中で学ぶ機会となった。「普段の自分の関わりについて振り返り考える時間が作れた」「他拠点の話を聴くことで、視野の広がりになった」と言う声があった。

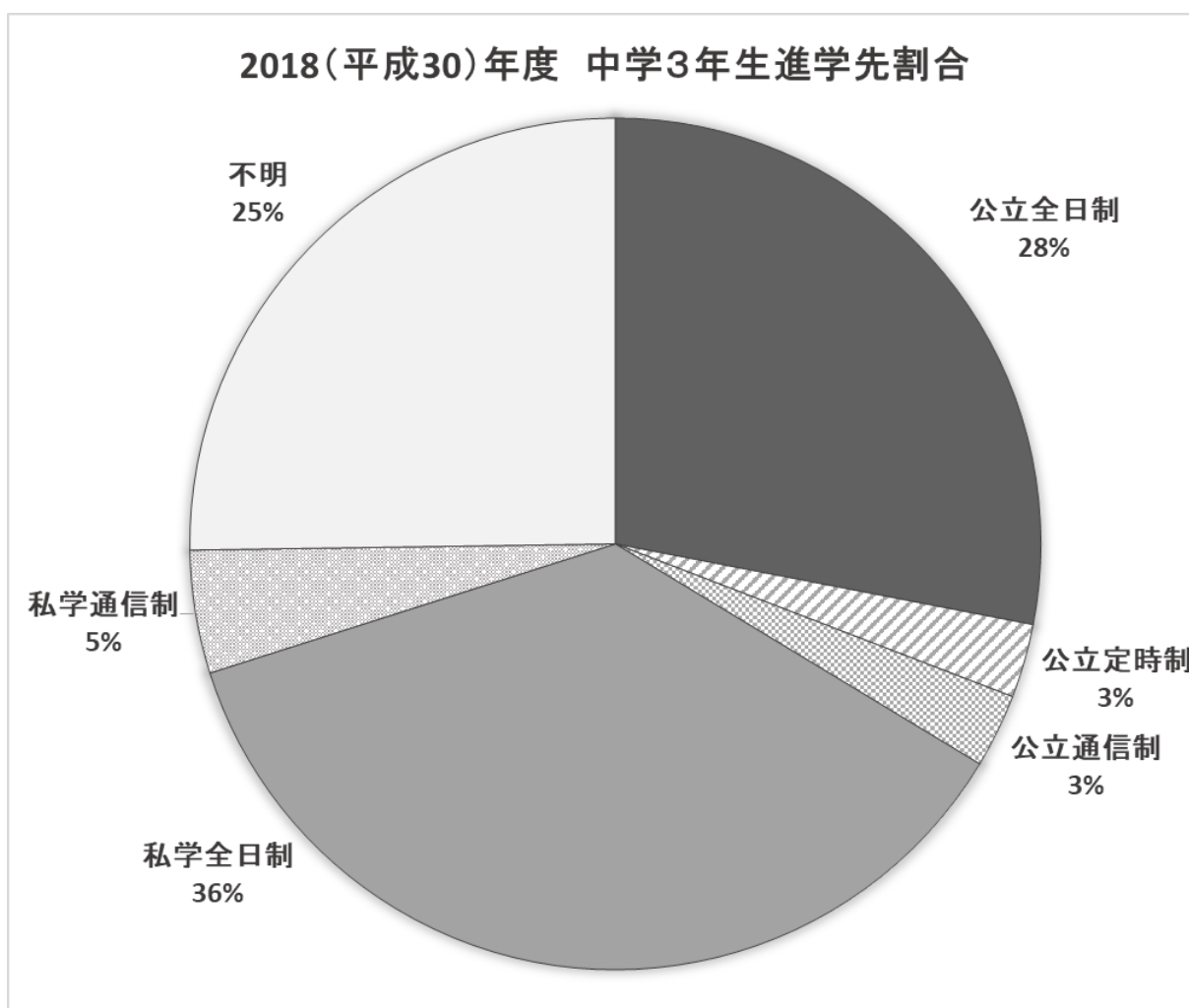
その他、「受験制度」「セクシュアルヘルス」「年間ふりかえり(パネルトークとグループディスカッション)」などを実施した。最終回では事業立ち上げに貢献した元ケースワーカーにもゲストに来ていただき、どんな経緯で学習支援事業が立ち上がったのか、当時の様子なども語っていただき、刺激を得られた会となった。

(5) コーディネーター担当者会

新規担当者含め、合同会議を年2回開催。それぞれの運営状況の共有のほか、運営の基礎やルール確認、成果や課題の把握、次年度10周年に向けた企画提案等を行った。

* 中学3年生進学先について

中学3年生の登録107名のうち、不参加等で連絡がとれない27名を除き全員の進路が決定した。



4. 社会的養護自立支援事業の取り組み

(1) 研修の実施に関すること

- 自立支援コーディネーター及び京都市ユースサービス協会職員対象
 - ・第1回 7月2日(月) 33名
京都市障害者地域生活支援センターとの顔合わせ
自立支援コーディネーターの役割(京都市子ども家庭支援課 奥井児童支援係長)
自立に向けた法律知識と法律相談へのつなげ方(弁護士/協会理事長 安保千秋氏)
 - ・第2回 10月30日(火) 23名
お金の管理について(SMBCコンシューマーファイナンス)
障害のある児童の自立支援について
(京都市南部障害者地域生活支援センター「あいりん」 相談員 太田氏)
 - ・第3回 12月18日(火) 26名
住まいのトラブルについて(京(みやこ)安心住まいセンター)
生活保護制度について(京都市保健福祉局生活福祉部生活福祉課職員)
青少年活動センター取組紹介と意見交換(中京・山科・サポートステーション)
 - ・第4回 3月8日(金) 22名
交流会事業「いこいーな」報告(南青少年活動センター 清水・松岡)
自立支援コーディネーター情報交換・事例検討
オブザーバー: 佛教大学教授伊部氏・講師長瀬氏
- 京都市ユースサービス協会 若手(1~5年目)職員対象 10月9日 24名
子どもの権利条約(えんばわめんと堺 北野真由美氏・橋本麻美氏)
事例報告会(北・山科・サポートステーションでの社会的養護の若者とのかかわり)

(2) 相談支援に関すること

- 対象者からの相談: 25件30回
内容: お金, 結婚, 職場適応, 親子関係, 虐待, 生き方, 余暇の過ごし方など
※ 退所者であることがわかった件数のみ計上した

(3) 交流会の運営及び実施に関すること

- 南青少年活動センターにて, 参加者同士がともに食事をしながら仲間と語り, 安心して過ごせる場の運営を行った。
事業名: いこいーな
日程: 4月から3月までの毎月第3土曜日17時~21時
場所: 京都市南青少年活動センター
内容: 参加者同士がともに食事をしながら仲間と語り, 安心して過ごせる場の運営。
準備, 片付けもプログラムの一環として位置づけ, 包丁の使い方を始め, 調理について実践的に学べる場とした。
参加者数: 延べ49名(内訳: 退所者39名, 入所中3名, 施設職員等関係者7名)

(4) 入所児童向け講習会に関すること

- 講演会: 阿部華奈絵さん(ゆでたまご代表)をゲストに迎えて
日時: 9月1日(土)14時~17時
参加: 8名(入所中児童3名, 退所者1名, 施設職員4名)
内容: ゲストスピーチ(当事者としての経験談), しゃべり場
- 訪問講習会
テーマ: 「お金」「はたらく」「性」より, 施設から希望をもらい, 施設訪問をして実施した。
対象: 入所中の15歳以上
内容: チェックイン(嘘つき自己紹介/カードトーク), テーマに合わせたワークと対話
 - ・1/20 迦陵園 【お金】 参加5名(2部構成) 訪問職員4名
 - ・1/28 平安養育院 【はたらく】 参加3名 訪問職員3名
 - ・1/31 積慶園 【お金】 参加3名 訪問職員2名
 - ・2/28 つばさ園 【はたらく】 参加2名 訪問職員4名
 - ・2/28 平安徳義会 【お金】 参加7名 訪問職員4名(内1名市職員)
 - ・3/25 聖嬰会 【性】 参加7名(2部構成) 訪問職員3名, 講師1名
 - ・3/28 和敬学園 【お金】 参加4名 訪問職員4名(内1名市職員)

(5) 関係機関との連絡調整に関すること

○事業運営にあたり必要な関係機関との調整, 関係づくりを行った。

- ・児童養護施設長会(挨拶・報告)
- ・アフターケア「メヌエット」(情報交換)
- ・ネットワーク「えんじゅ」への団体参加(情報交換・研修参加)

○協会を活かした機関連携

- ・子ども若者支援室:窓口への同行訪問や, 施設・センターと3者でのケース共有・相談
- ・若者サポートステーション:コーディネーターからの紹介で登録
- ・学習支援事業:施設関係者2名継続参加

Ⅲ-1. 北青少年活動センター

全体の動向

年間利用者数は49,379名となり、2017年度と比べて792名増加した。増加の背景には、自習室を利用する中高生の部屋利用やロビー利用、31歳以上の一般利用者の部屋利用がある。一方、事業参加者数は減少したが、ボランティア登録者数は、241名と前年度よりも141名増加した。

1. 自然体験・環境学習事業(センター固有テーマ)

①自然・暮らし体験クラブ

○大文字山登山、岩倉夏野菜づくり、立命館大学のシチズンシップスタディーズと共に小野郷の農業体験を実施した。天候に左右されることが多く、参加者が集まっても中止になった事業も多くあった。

②こども自然・暮らし体験クラブ

○月2回のボランティアとミーティングを行い、北区周辺で子ども対象とした、自然体験プログラムを実施した。ボランティアスタッフのモチベーションが低下する時期もあったが、年度途中からは、ボランティアの主体性や意欲が上がり、ミーティングや活動への参加人数も安定した。

③環境負荷の少ない施設運営と啓発

○KESの取り組みの一環として、雑紙の回収、節電・節水は掲示による啓発を行い、ゴミの排出の多い料理室の利用者に対して、分別への協力の声掛けを始めた。また、料理室以外の利用者にもゴミを意識してもらうため、北コミまつり以降、中身の見える透明のゴミ箱を設置し、ゴミの分別を働き掛けた。

2. 居場所づくり支援事業

①ごぶSAT(ごぶさた)

○コミュニケーションが苦手など、何らかの課題を感じている青少年を対象に、料理やレクリエーションなどのプログラムを実施した。参加者が固定されつつあることが課題である一方、継続参加者の仲が深まり活動内外で自主的な活動が生まれている。

②アフタヌーン亭(地域若者サポーターなどの協力を募って実施)

○地域若者サポーターとセンター利用者とのしゃべり場事業。普段職員が関わることができていない青少年にも積極的に声をかけ、関係を築いていた。

③卓球フリータイム

○9のつく日に実施。開催曜日が変わることで、多様な属性の青少年が参加し、ラリーを行うことができた。過去の参加者が友人を連れてくるなど、にぎやかで活気があった。

3. 地域交流・連携・参画に関わる事業

①地域で始めるボランティア

○地域の環境団体(日本環境保護国際交流会)と清掃活動、北区周辺の地域イベントへのブース出展を実施した。清掃、イベント共に単発参加者が多く、年代も中学生～社会人までさまざまであった。年度途中からは関わりや進行を工夫することによって、継続的に参加する若者も増加した。

②サンタクロース・プロジェクト

○クリスマスイブの夜に、青少年がサンタやトナカイに扮して、保護者から事前に預かったプレゼントとパフォーマンスを届けた。家庭に満足してもらえるように取り組むことが結果的に、ボランティアだけでなく、保護者のボランティアに対する思いにも影響を与えていることがうかがえた。

③北コミまつり(センター利用団体、地域団体との協力事業)

○参加者同士が交流できるお祭りを目指して、障がい者も含めた「地域」をキーワードに、企画を進めた。今年度は昨年度の課題であった地域の団体やボランティアスタッフの募集を積極的に行った結果、ブース出展者やボランティアスタッフが増加し、新たな交流が生まれた。

④つながるワークショップ(北区役所との連携事業)

○北区役所主催のまちづくり事業(ワークショップ)の企画・運営を、関係する機関と協働して行った。

⑤北区学生×地域応援団(北区社会福祉協議会, 大学ボランティアセンターと連携)

○北区内の4大学(京産大, 立命館大, 佛教大, 大谷大)と, 北区社協, 北区まちづくりアドバイザー, 北青少年活動センターの組織同士の関係性づくりを行うため, 情報交換会を定期的実施した。

⑥北区人づくりネットワーク(教育委員会との協力事業)

○2/13(水)ふれあいトーク@加茂川中学への協力を行った。

⑦運営協力会

○6月に総会を実施した。

4. 担い手育成に関わる事業

①自主活動支援事業

○関係性が構築されている若者から「こんなことがしてみたい」という声が寄せられ, その中からボードゲーム大会が実現した。

②きたせいボランティアネットワーク「KITARA」

○北センターで活動するボランティアが横のつながりを増やすために, 交流3回と活動報告の場をもち, 12月には北コミまつりでKITARAブースを開催した。

5. 利用促進・発信・広報に関わる事業

①自習室

○青少年が集中して勉強するために, 登録制で自習室を開放した。登録時に施設や事業を紹介するなどワーカーとの会話が生まれ, これをきっかけに他の事業に参加するなどの流れが見られた。

②広報充実事業

○大学の授業内でセンターの取り組みについての説明や, 事業のチラシ等を近隣中高の全校生徒配布を実施した。また, 一般利用者促進を目的としたリーフレットを青少年と共に作成し, 配布した。

③ロビープログラム(センター利用者を巻き込む事業)

○掲示型のロビー企画から, 大掃除やアイスづくりなどイベント型のロビー企画までさまざまな形で若者と関わる機会をもつことができた。

④卓球サロン(自主事業)

○週に1回平日の午前中に, 大人も参加することができる卓球を実施した。60代の参加者が20代の参加者の悩みを聞くなど多世代交流の場にもなった。

6. 相談・支援の取組

①相談事業

○様々な困難を抱える若者の継続相談があり, それらに対する支援を模索するために, ワーカー同士で相談内容を共有する機会を設けた。

②就労支援事業「チャレンジ・インターン」(京都若者サポートステーションとの連携事業)

○就労に対して, 不安を抱える未就労者がセンター開館業務を通して, 生活のリズムが整い, 小さな経験を積み重ねることができた。働くことへの自信につながるような場の提供が行えた。

③北・上京中3学習会(学習支援受託事業) ※再掲

○生活保護, 貧困家庭, ひとり親家庭などの世帯の中学生を主な対象に, 高校受験等に向けた学習会を行った。北学習会は立命館大学衣笠地区BBS会の協力を得て, 上京学習会は, コーディネーターを中心に様々な大学の学生をボランティアに迎え, 主体的に運営できるように支援した。

7. 少年非行の解決・軽減に向けた取り組み

①非行少年等立ち直り支援事業(京都府青少年課と連携)

○京都府の「立ち直り支援チーム(ユースアシスト)」に協力し, 家庭裁判所に送致され係属中の少年を参加対象にして, 月1回の地域清掃活動を行った。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者のべ数	実施場所等
子ども自然・暮らし体験クラブ				
ミーティング, 下見, ふりかえりなど	通年(週1回)	109	26/Vo431	北センターほか
プログラム	5・7・9・11・2月	5	13/Vo30	北区小野郷
自然・暮らし体験クラブ				
大文字山ハイク	9月	1	4	大文字山
シチズンシップスタディーズ	5～11月	10	109	北区小野郷
夏野菜づくり	4月～9月	21	83/Vo31	作業:岩倉長谷町 販売:北区役所
地域で始めるボランティア				
ミーティング, 準備作業, ふりかえりなど	通年(月1～2回)	22	29/Vo61	北センター
清掃活動	通年(第1土曜日)	12	12/Vo112	紫明通り
イベント参加・協力	随時	6	1073/Vo53	北センター 北センター周辺
アフタヌーン亭	通年(第1土曜日)	11	152	北センター
ごぶSAT				
ミーティング, 準備作業, ふりかえりなど	通年(月3回)	22	54	北センター
プログラム	通年(月3回)	49	330/Vo54	北センターほか
KITARA	通年	8	34/Vo58	北センター
サンタクロースプロジェクト				
ミーティング, 準備作業, ふりかえりなど	10月～12月	32	25/Vo115	北センター
プログラム	12月24日	1	45/Vo8	北センター周辺
きたせいフリータイム	通年(月2～3回)	31	232	北センター
自習室	通年(ほぼ毎日)	355	4565	北センター
ロビープログラム	通年(月に1～2回)	8	469	北センター
北コミまつり				
ミーティング, 準備作業, ふりかえりなど	9月～12月	38	166/Vo135	北センターほか
当日	12月16日	1	1990/Vo46	北センター
北中学生学習会	通年(毎週木曜日)	48	470/Vo234	北センター
上京中学生学習会	通年(毎週月曜日)	46	433/Vo186	上京区役所

Vo.=ボランティア

Ⅲ-2. 中京青少年活動センター

全体の動向

若者と地域の間立つ「ハブ」としてのセンターを目指す3か年計画をスタートした。ワーカーの産休による欠員状態の中、初年度の目標(来館している青少年との関係づくり、コンテンツの充実、開拓・強化したい関係先の特定)は一定程度達成した。

1. 若者のニーズを社会化する事業(センター固有テーマ事業)

①ニーズ発掘事業HUB

○青少年のニーズ、課題、活動状況の把握(ロビー企画)、チーム内で青少年のニーズを共有する仕組みの整備(日誌など)、若者のニーズや課題に沿った情報発信・イベントの開催(ロビー企画、性的同意啓発イベント、センターだより発行など)、地域資源の整理(「なかせい地域マップ」を設置)を行った。

②活動応援事業CHEER

○センターが多様な資源と出会う場として機能することを目指し、グループの活動紹介、他機関とのコラボ・マッチング、Skypeで全国の高校生が討論する「全国高校生衛星生中継」をはじめとする活動のサポート、グループ活動の成果を発信し交流する「なかせいオープンデー」の実施を行った。

③交流プログラムCONTACT

○ロビーに設置して欲しい雑誌や漫画を投票してセンターの運営に携わる機会を作ったり、自習した後の消しゴムのカスを集めて量を視覚化し利用者同士の一体感をつくる「消しカスター」、職員に無記名で相談や質問をする「なんでも質問BOX」など、自習での利用が多いロビー利用者が、他者と出会い交流することで多様な価値観と出会い自己表現できることを目指した交流プログラムを行った。年度末には、長期間利用していた利用者の卒業式も行った。

2. 居場所づくり支援事業

①街中コミュニティ

○月2回日中、コミュニケーションに苦手意識を持つ参加者10名程度が、テーマトークをし、活動を自分たちで決めて過ごした。回を重ねるごとに場に慣れて表情が明るくなっていき、参加者同士の交流にチャレンジする様子や、自身のしんどさを会の中で口にして受容され、激励されたりする様子、センターの他の事業に参加するなど、行動範囲を広げる様子が見られた。

②赤レンガ Cafe

○月1回、若者サポーターの協力を得て、参加者それぞれがコラージュを作る活動を行った。主として様々なセンターの居場所事業参加者や支援室・サポステ利用者が、社会とつながり、近況を報告しあう機会として利用されている。

3. 地域交流・連携・参画に関わる事業

①中京センター周辺地域の団体・機関との連携事業

○中京区における種々の子ども若者支援ネットワーク会議や活動に参加したもののセンターの独自性を発揮することはできなかった。御池中学校にてふれあいトークに参加し「なかせいだより」の全校配布が依頼できる関係を構築しつつある。

②育成委員会の設置と運営

○3月に委員会を実施した。新たな委員も多く、中京青少年活動センターから中央青少年活動センターへの名称変更も含めた、センターの役割や実情について情報共有を行った。

4. 担い手育成に関わる事業

①インターンや社会教育実習、職場体験などの受入

○立命館大学、京都女子大学から3名インターンを、京都女子大学から1名実習生を受け入れ。京都光華女子中学校から職業体験を1名受け入れ。

②ユースワーカー養成講習会

○年に2回、2日間の基礎講習を実施した。いずれの回も外部参加者が9名であり、ネットワーキングの場

として活用されていた。学習会コーディネーターやセンターボランティアが参加するなど、関わりのある青少年の研修の場としても機能した。

5. 利用促進・発信・広報に関わる事業

①利用促進事業「若者のためのフリースペース」

○自習室は特に市街地にある無料で使える自習スペースとして、中学生・高校生・浪人生を中心に需要が高かった。

②トレーニングジムガイダンス

○月に2回、ジムアドバイザーの協力を得て、ジムを安全に使えるよう講習を行った。月に約40名近くの新規登録があり、センターの入り口となる機能を果たし、一部は他事業に繋がった。反面、青少年の利用が減少し、利用者間トラブルが発生するなど、安全な運営が課題である。

③教室事業(自主事業)

○年度を通して、センター認知度を高め事業収入については他事業に充当することを目指し、若者のニーズの高い教室としてヨガ・着付教室を開講した。受講者同士や講師とのコミュニケーションもみられ、満足度も高かったが、いずれも新規参加者の獲得が課題であった。

6. 相談・支援の取組

①相談事業

○青少年は昨年度と同程度の相談件数であった。事務局あてに活動紹介を求める相談の影響もあり、グループ活動に関する相談が最も多かった。ちょっとした相談ができる場所としての認知向上が引き続き課題である。

②就労支援事業

○夏に1名、秋に1名を受け入れた。体験者は複数の担当者とコミュニケーションを取り、担当職員同士は連携して受け入れることができた。労へのステップとして、サポステのサポートから少し離れた外部への体験へと進むことが確認できている。

③かけはし(中学生学習支援受託事業)【再掲】

○週1回、10月より週2回、学習会の運営を行った。ボランティアと学習者との信頼関係があったことにより外部機関へつながったケースもあった。反面、ワーカーへの情報共有が遅れることもあり、ワーカーの関わりを強める必要がある。継続参加の中学生は全員高校進学を果たした。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者／のべ数	実施場所等
ニーズ発掘事業HUB	通年	8	108名	ロビー等
活動応援事業CHEER	通年	4	809名	ロビー等
交流プログラムCONTACT	通年	26	649名	ロビー等
街中コミュニティ	第2・4金曜日	24	16名／117名	和室等
赤レンガCafe	第3土曜日	12	111名	ロビー等
ユースワーカー養成講習会		2	20名	大会議室
若者のためのフリースペース	通年		自習室=2289名、フリースペース=159名	和室、中会議室、小会議室A・B、大会議室
トレーニングジムガイダンス	毎月第2日曜・第4土曜	24	421名	トレーニングジム
教室事業	ヨガ=毎週木曜日 着付教室=6月、7月、10月	56	ヨガ=438名／63名 着付教室=14名／93名	和室、レッスンスタジオ
かけはし	毎週木曜日(11月から毎週火・木曜日)	72	23名／551名	中会議室

Ⅲ-3. 東山青少年活動センター

全体の動向

今年度は新たにセンター協同事業「ユスカル！」の事務局を担い、青少年が企画、運営として参画し、多くの市民に向けた若者文化の発信ができた。また、地域交流事業でも、これまで取り組んできたダンス事業でのつながりから、地域での新たなプログラム構築やアウトリーチに向けた展開に向けて試行した。

1. 創造表現活動事業(センター固有テーマ事業)

(1) 創造体験事業

① 演劇ビギナーズユニット

○演劇初心者対象の演劇セミナーで、最後に修了公演を実施。演劇の創作過程の中で、参加者それぞれがコミュニケーションスキルや社会的な行動様式を身につけたり、自分が受け入れられる体験や、様々な価値観と出会うことで他者を受け入れたり、価値観の幅を広げる体験の機会を提供した。また、これらの体験によって、青少年のその後の自主的な活動や他事業への参画につなげた。

② ダンススタディーズ1

○初心者を対象とした集団創作ダンスのプログラム。中学生から社会人までの多様な参加者が集まった。参加者同士の関わりにより、それぞれが自己を見つめる機会となった。また、参加者が集団への意識をもって、自主的に作品創作のリーダーシップをとる進め方ができた。

(2) 障がいのある青少年の余暇と成長支援事業

① 東山アートスペース

○知的な障がいのある青少年の余暇充実を目的とした創造・創作活動の場を提供した。申込者数はA・B両コース定員(各コース16名)に達した。強制ではなく自由に制作に取り組むことのできる空間作りをスタッフ全員が意識したことで、参加者の安心につながり、1年間定期的な参加を続けることができた。また、ナビゲーターの世代交代として新たに彦坂氏(京都造形大こども芸術学科講師)を迎えた。

② からだではなそう～表現活動へのお誘い～

○知的な障がいのある青少年を対象に、余暇充実や交流から生まれる成長の機会を目的に体をつかった創作表現活動の場を提供した。活動年数の多い参加者が、自ら車イスを押したり、他者に迷惑がかかるような新規参加者の行動に対して注意する側に回ったりと、リード役に回る様子が見られ、昨年度からの変化を感じ取ることができた。運営には、ダンサー・俳優のナビゲーターとボランティアの協力を得て実施した。

(3) 若者文化発信事業

① ステージサポートプラン

○創造活動室を使った発表。公演活動への支援と、公演準備のための個別相談を実施した。劇場の閉館が続く中、公演希望者が多く、極力サポートするよう心がけた結果、実施公演数は25と、過去最大となった。その影響でYU'Zの述べ利用グループ数は前年度を下回った(YU'Zの複数回利用の減少は公演場所の減少も影響か)。また、面談時から必要なニーズを丁寧に訊き、ワーカーと創活番ボランティア、専門家(京都舞台芸術協会に依頼)でサポートすることで、予想以上の成果が得られたり、逆に課題が明確になったという報告や、安心してチャレンジできる、他にはない場であるとの評価も得た。

② 自主活動支援事業

○ライブやビブリオバトル等の自主的な活動をしたいと考える青少年を受入れ、丁寧に実現させたいことを聞き取ることで、必要とされるサポートをすることができた。それにより、個別相談へつながるケースもあった。

③ ロームシアター京都との連携事業「未来のわたしー劇場の仕事ー」

○創造活動の現場のプロフェッショナルを知るロームシアター京都で、前期はフェスティバル型の事業に関わる機会、後期は演劇公演に関わる機会を提供した。プロの仕事の実際や、各部門のプロが協働して1つの企画・公演が成り立っている事を目の当たりにし、参加者たちは好きなことを仕事にすることの難しさや、そのために必要なスキルのことなど、将来の職業選択に関して、自分と向き合う時間を持つことができた。

④ センター協同事業(若者文化発信事務局事業)ユスカル

○前年度のプレイベントの実施を経て、京都洛北ロータリークラブの45周年記念事業として共催いただき、センター合同の文化イベントを盛大に開催することができた。ロームシアター京都との連携事業から、ボランティア

参加を得、イベントプロデュースに興味のある青少年やアーティストの参画、多くの表現者が参加し実施した。来場者や観客等からのフィードバックが、次の創作意欲につながる貴重な機会となった。

2. 居場所づくり支援事業

①ロビープログラム

○学校や家庭以外での居場所を求めている青少年へ安心できる居場所となるロビー事業を行った。他事業の作品展示を定期的実施し、センターに来る利用者が気軽にアートや創作表現に囲まれるような空間を提供した。また、コミュニティカフェでは、他団体から協力を得て実施することができた。

②ワタシ+1(プラスワン)

○引きこもりがち、昼夜逆転しがちな青少年や、平日昼間の居場所がない、孤立感のある青少年を対象に、少人数で安価なお稽古事感覚で出かけられる場を提供した。「陶芸ワークショップ」では、3名のサポステ登録者からの参加があった。また、その他の1名が事業終了後、サポステ登録につながった。「ホップステップタイム」では、参加者自身がからだの状態や変化について向き合う機会を提供することで、参加者にとって相談機関の次の居場所となるように実施した。

3. 地域交流・連携・参画に関わる事業

(1) 地域交流・連携・参画事業

①学校連携事業

○中劇研スタッフワーク講座、高劇連演劇講習会、中学校演劇部合同公演、高劇連中部支部合同公演「冬劇祭」に青少年ボランティアが参画できる機会の提供と、講習会のコーディネートや公演支援を行った。

②地域交流事業

○自己肯定感向上プロジェクト推進会議、東山区はぐくみネットワーク実行委員会、スマイルミュージックフェスティバル実行委員会への参画や東山いきいき市民活動センターとの共催事業「学校ごっこ」の実施等の既存事業のほか、東山図書館とのブックカバーづくりのコラボ企画を新たに実施した。

③運営協力会の運営と連携

○6月に運営協力会を開催し、事業報告や計画の説明だけでなく、若者を取り巻く環境について委員の方々に考えてもらえる機会として、東山警察署生活安全課課長より、京都市と東山区における少年非行の現状についての講座と、「ネット犯罪」についての事例をまとめたDVDを視聴し、SNS等ネット犯罪に若者が被害者にも加害者にもなりえる犯罪について学んだ。

4. 担い手育成に関わる事業

(1) 担い手育成事業

①インターンシップ受け入れ

○センター事業や業務に、京都女子大学の社会教育実習生や有償インターン生を3名受け入れて指導した。

②センター事業における各ボランティアの育成と支援

○アートスペースでは、「障がい者施設を見学したい」といった声やプログラムへの提案などが積極的になるようになり、参画意識の高まりが見えた。しかしながら、事業の運営面からすると、全体的にボランティアスタッフが不足している。

5. 利用促進・発信・広報に関わる事業

(1) 利用促進・発信・広報に関わる事業

①情報発信および広報活動の充実

○ブログやFacebookなど用途に合わせた情報発信を行い、センターや事業の認知を広げることができた。それが部屋の稼働率を上げることにつながったが、構成メンバーの少ないグループの長時間利用の増加等により、利用者数はそれほど伸びなかった。

②利用促進事業

○空き室状況を加味した開放事業やニーズに合わせたサービスの充実を通じて、施設利用の促進を図った。共有スペースを通して他人と協調し合うことをさまざまな視点から利用者に提供することができ、利用の仕方に変化が見られた。

6. 相談・支援の取組

(1) 相談・情報提供事業

○相談を受ける基盤として、ロビーワークの積極的な実施や、各事業での参加者・ボランティアとの関わりから、信頼関係の構築を図った。また、必要に応じて、職員間で検討し、サポステ・支援室などと情報共有を行った。相談からまちライブラリーへの参加につなげ、定期的に職員以外の他者と関われる機会をつくった。

(2) 就労支援事業(京都若者サポートステーションとの共催事業)

①じぶんみがきダンス

○ダンス創作を体験しながら、自己と向き合う力を高め、自己表現力やコミュニケーション力を培い、就労準備の前段階としての就労意識を高めるきっかけを提供した。受容的な空間に身を置き、からだをほぐして他の参加者とコミュニケーションを取りながらダンス創作を進めることで、支援者の同伴がなくてもセンターに来れたり、スマホの写真をきっかけにコミュニケーションが取れるようになったり、就労準備に関しても少しずつ前向きになり、次の行動につなげられていた。

(3) 中学生学習支援事業

①東山中学生学習会の運営(中学生学習支援受託事業)【再掲】

○経済的な問題などから、家庭で勉強する環境が整いにくい状況にある中学生に学習支援を通じて進学をサポートができた。また、安心して過ごすことのできる居場所機能も提供できた。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者／のべ数	実施場所等
演劇ビギナーズユニット	5月～9月	85	17(2, 953)	自主練習・公演入場者含む
ダンススタディーズ1	12月～3月	45	8(789)	自主練習・公演入場者含む
東山アートスペース	5月～3月	19	32(421)	ボランティア数含む
からだではなそう	6月～3月	20	21(201)	ボランティア数含む
ステージサポートプラン	通年	201	4, 981	ボランティア数含む
ステージサポートプランYU'Z	通年	155	1, 256	
自主活動企画支援	通年	14	717	
ロビープログラム	通年	8	115	ボランティア数含む
ロビーギャラリー	通年	281	13, 783	同時期複数開催含む
コミュニティカフェ		4	38	
ヒガシヤマDEものづくり	通年(週2回)	99	172	
じぶんみがきダンス		10	79	
自習室	通年	282	597	
焼成窯一般開放	通年(月1回)	12	106	
ユスカル	11月4日	1	3, 005	出展・出演・スタッフ含む
ワタシ+1		26	147	
共催事業		37	954	
中学生学習支援	通年(週1回)	50	610	ボランティア数含む
フリータイム	通年	105	78	
未来のわたし	年2回(7・8月, 1・2月)	20	25(221)	

Ⅲ-4. 山科青少年活動センター

全体の動向

地域とともに青少年の育ちを支えるために、食をテーマとした地域での居場所づくりネットワーク(子ども食堂)の基盤づくりをすすめた。また、「べる」事業では、地域での利用や活動機会を拡げるため、新たなパートナー獲得をおこなった。「やませいフェスタ」にてパートナーが出店をする等パートナーと利用者が繋がるための機会をつくった。事業全体として、ボランティア募集の広報に力を入れ、青少年のボランティア活動参加の機会を増やした。

1. 地域交流・連携・参画に関わる事業(センター固有テーマ事業)

①地域通貨「べる」(自主事業)

- 青少年(10代)がセンターを中心としたエリアで利用できる地域通貨「べる」を、事務作業や地域活動等の役割を担う対価として発行した。
青少年が、責任と「誰かの役に立つ」喜びを学ぶ機会として、また地域の大人たちと青少年が出会い「地域で青少年の成長を支える」土壌づくりの一つとなることを目指して実施。今年度は、外部での「べる」利用店舗の開拓に重点をおき新たな協力者の獲得に力をいれ、29年度末6店舗から、13店舗に増えた。
また、事業開始以来、初めて地域店舗での「べる」利用があった。

②やませいフェスタ(「ぐるっとふれ愛まちフェスタ in 山科」への参画)

- 「ぐるっとふれ愛まちフェスタ in 山科」と同日開催し、実行委員として連携・協力した。
- センターで活動する青少年グループ・青少年育成団体・「べるパートナー」等事業協力団体等に呼びかけ、出展ブースの充実を図った。その他活動報告やステージ発表、体験型企画を実施し、目玉イベントとしてシアターワーク京都そらまめの協力を受け「ハロウィンお化け屋敷」を実施した。

③運営協力会との協働事業

- 総会や合同事業を実施開催した。
- 青少年との意見交換と懇談会を実施し、会員に青少年の活動や現状を知ってもらう機会となった。意見交換を行った青少年グループ「D-Works」がロビー内壁塗装や本棚製作をおこなった。
- 40周年記念事業として、新規掲示板のとりつけや案内板の改修を行った。
- その他、運営協力会が主催する事業(少年野球教室)を実施した。

④地域共催・ネットワーク事業

- 青少年・子どもに向けて取組む団体等の活動への助言や情報提供、運営協力、活動機会の提供、広報協力等サポートを行った。(日本語教室たちばな倶楽部、BBS アフタースクール、山科区母子寡婦福祉会、KYOTO BREAKERS SESSION BATTLE、宿題かたづけ隊(京都橘大学 大久保教授)、山科未来ファミリーホーム)
- 地域関係会議やイベント等で青少年に関わる部分の協力を担った。
- 食をテーマとした地域での居場所づくりネットワーク「まちのちゃぶ台ネットワーク山科」の一員として取り組み(情報交換・物品などの拠点、事務局等)、また学習支援「勸修中学校学びサポート」を協働しすすめた。

2. 居場所づくり支援事業

①ロビーワーク

- 青少年にとって居心地のよい場づくりを工夫し、ユースワーカーやボランティアとの関わりを通して、青少年がさまざまな背景を持つ人と出会い、多様な生き方に触れ自身を見つめる一助となることを目指し行った。
日常の関わりの中から情報提供や相談に繋がった。

②余暇充実事業(青少年の自主企画含む)

- 土曜日の午後に、気軽に参加できるイベント(スポーツ、食、工作、美術、芸術、科学等)を実施した。
- 休日の午後や平日の放課後、スポーツルームにおいて青少年が予約なしで利用できる「フリータイム」を設けた。中高生・青少年の新規利用の開拓および定着を図った。
- 日祝日及び長期学休期間中、中高生がスポーツルームの利用ができる時間帯「中高生タイム」を設け、中高生の活動場所の確保と利用促進に取り組んだ。
- 「京都橘大学和洋菓子研究会」による自主企画の運営をサポートし実施した。

③やませいカフェ・やませい食堂

(1)やませいカフェ「Mountain Blue」

- 毎週火曜日の放課後、青少年ボランティアの協力を得て軽食等の調理・販売を行い、憩いの場となる空間をつくった。40周年誕生日月間として8月は毎日ハニートーストの提供をした。
- 利用にあたり、地域通貨「べる」との連動を行なった。

(2)やませい食堂

- 「子ども食堂」事業に参加協力している「まちのちやぶ台ネットワーク山科」とともに実施した。(月に1回程度)青少年との交流、相互理解をすすめた。
- 地域の方のみならず、青少年ボランティアの参加も多くあり異世代間交流の場としても機能した。

④自習室&自習室カフェ

- 空き部屋を確保し、自習室として開放した。
- 利用時にたまるポイントカード方式の「自習室カフェ」を通年で実施することで、利用者と職員との関係づくりや相談に繋がった

3. 担い手育成に関わる事業

①やましな未来プロジェクト

- 気軽に参加できるボランティア活動の機会を定期的につくることができた。(地域の清掃活動や区民祭り等)
- 今年度より「京都橘大学文学部キャリアゼミボランティアコース」のプログラムとして受入れを行った(2名)。既存のプログラムへの参加のほか、講師を招き「山科のことを知る研修」を行った。地域のことを知っていきながら、プログラム参加青少年の関心に応じた自主企画を実施した。
- その他、山科区社会福祉協議会主催の「ボランティア体験講座」に参加し、ボランティアに関心のある青少年に事業の紹介をおこなった。

②ボランティア活動促進やインターンシップ・実習生の受け入れ

- 各事業のボランティア募集を行った。大学・高等学校・市施設・関係団体への郵送のほか、大学での授業、講演依頼を受けた講演会やイベント、地域会議での広報等を積極的に行い、またHPの更新やActivo等ボランティアサイトでの更新を積極的に行なったことで、「ボランティアをしたい」という問合せも増え、ボランティアの参加に繋がった。
- 京都橘大学インターンシップ、ボランティア活動チャレンジ(学生PLACE+)、立命館大学大学院(ユースワーク実習)を受け入れた。

4. 利用促進・発信・広報に関わる事業

①利用促進・広報

- 新中学1年生(山科区内全員配布)に向けたセンターリーフレット、クリアファイル、ニュースレターとともに新中学1年生の入学時期にあわせて配布した。
- 山科区内の中学校・高校に対し、ニュースレター(やませいだより)を定期的に送付し、各教室への掲示を依頼した。(年間5回)
- ブログやホームページ、他情報サイト、FacebookやLINE@などのSNSを用いて情報の発信をすすめた。
 - ・HPや情報サイトの更新をまめにおこなうことを心掛けた。また、ブログやFacebookでの発信も定期的におこなった。上記は問合せやボランティア参加に繋がった。
- 開所40周年を迎えることを随時伝えることを職員皆が意識し市民にアピールした。
 - ・お誕生日月間では毎日「ハニートースト」を食べることができる、何かしらイベントをおこなっていることが利用者の口コミで伝わり、継続利用・新規利用に繋がった。
- ネットワーク関係や会議での取組周知の効果があり、新聞や情報誌、フリーペーパー等の取材依頼(地域通貨「べる」・子ども食堂)に繋がった。
- 「やませいフェスタ」では、べるパートナーの協力や早期からの周知、新聞への折込みチラシ(近隣地域4,000部)も行なったことで今までにない数の集客を得た。

5. 相談・支援の取組 ※就労支援, 学習支援事業含む

①情報提供・相談

- 件数・回数ともに昨年度より増加した。特に青少年の「親子・家族との関係」「恋愛・恋人との関係」の相談が

多かった。(青少年:155件323回(前年比+67件115回)／その他:25件34回(前年比-8件-5回)
 ○外部機関との協力連携をしながら、個別対応、サポートを行った。(山科区役所子どもはぐくみ室、地域生活支援センターとの情報共有等)

②山科中学生学習会(中学生学習支援受託事業)【再掲】

○対象となる中高生を受け入れ、高校進学や日々の学習支援を青少年ボランティアとすすめた。高校進学後の利用者の参加もあった。

③サポステ連携事業「働く前のコミュニケーションワーク」

○京都若者サポートステーションの登録者などを対象に、ストレッチや発声練習、インプロビゼーション(即興演劇)の手法を用いて、自身をふりかえり気づきを得るワークショップを開催した。6月・2月に実施するも、2月の4日間コースは定員に満たず中止となった。

6. 少年非行の解決・軽減に向けた取り組み

①ユース・アシスト(京都府との連携事業)

○京都府青少年課が実施している「少年の立ち直り支援事業」(ユース・アシスト)に協力し、定期的な学習支援や面談のための場所提供を行った。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者／のべ数	実施場所等
地域通貨「べる」(自主)	通年	82	502	山科センターおよび周辺地域
やませいフェスタ	地域会議7月～11月 本番11/4(準備11/3)	1	当日参加:2,231 スタッフ・出店者:142(実数)	山科センター／会議は周辺施設
地域共催・ネットワーク事業	通年	48	419	山科センター・京都市山科合同福祉センター
まちのちゃぶ台ネットワーク 山科(世話人会)	5/27・8/5・11/11・ 2/3	4	28	山科センター／会員施設
勸修中学校区こどもの学び サポートプロジェクト(自主)	通年 毎週木曜日	21	484	京都市立勸修中学校
余暇充実事業	通年 ・自主企画(6/17・2/17) ・中高生タイム(日祝日・長期 休暇期間)	237 2 142	1,768 29 510	山科センター
やませいカフェ	通年 毎週火曜日 40周年お誕生日月間企画 8月毎日実施	51	利用者:696 ボランティア:18/74 40周年利用者:61	山科センター
やませい食堂	月1回(11月より)第3土曜 ・夏休み食堂(7/26～8/1 6(土)4回) ・テスト飯(7/5・9/8・ 10/6)	5 4 3	利用者:126 70 50 ボランティア:24/88	山科センター
自習室	通年	369	3,143	山科センター
自習室カフェ	通年	39	45	山科センター
やましな未来プロジェクト	5月～3月(ミーティング含む) 外部での活動	34 5	19/254 48	センター近辺地域 安祥寺川 山科中央公園他
中学生学習支援事業	通年 毎週金曜日	122	598	山科センター
サポステ連携事業 「働く前のコミュニケーション ワーク」	①1日コース:6/12 3日コース:6/19・22・26 ②1日コース:2/5	5	①1日:12 3日:8 /29 ②3	山科センター
ユース・アシスト (京都府との連携事業)		50	124	山科センター

Ⅲ-5. 下京青少年活動センター

全体の動向

平成27年4月に現在地に移転後、大幅に増加した利用者数は94,733名(前年度比+42名)となった。高校生年代から学生, 社会人サークルに加え, アクセスのよさから, 京都市外(府外)から企業の利用もみられた。また, 旧センター周辺の地域(商店街)に加え, 崇仁地域や下京区内の地域団体・行政機関からも, お祭りやイベントなど多くの協力依頼があり, 青少年施設としての市民認知度も高まっている。

1. スポーツ・レクリエーション事業

(1)しもせい運動部

○スポーツに親しむきっかけづくりとして, 毎月2~3回のペースで, 本館3階の下京地域体育館を借用し, 青少年グループへ提供した。LINE@を使用し, 登録者に直接情報が届くようにしたり, ニーズのある通信制高校を訪問したり, 広報を行ったが, 利用件数は増えず, 中止に至る回が多かった。

○スポーツ交流会として, 海外のスポーツや桶卓球のイベントを企画したが, 実施に至らなかった。

(2)トレーニングルーム事業

①トレーニングルームガイダンス

○「ジムアドバイザー」による協力体制づくりを行い, トレーニングルームを初めて利用する人を対象に, 第1・35月曜日午後7時半から, ガイダンスを実施した。利用者の口コミなどにより, 参加者は160名と, 昨年度よりも若干減少した。

○アドバイザーの若返りを図るため, 高校生の頃から利用している学生2名をリクルート。正式登録に向けて試験的に活動を開始した。

②しもせい筋トレ部(旧・トレーニングルーム利用活性化事業)

○高校生年代を対象に, 平日の利用できる時間帯を限定し(朝, 昼, 夜の3つから選択), トレーニングルームの利用促進を図った。

○近隣の高校(通信制を含む)へのチラシ配布を行った成果か, 登録者数が26名となり, 昨年度より倍増した。

2. 居場所づくり支援事業

①しもせい道の駅/しもせいカフェ

○ロビーに集う幅広い若者が, 様々な他者との出会いや関わりを通じて, 多様な関係性を築く機会を築く場として, 月2~4回, センターロビーにて安心して話せる居場所的空間を提供した。

○参加者の中には, カフェへの参加がきっかけで職員との関係を築くことができ, 個別相談につながることもあった。

②しもせい道の駅/アンケート企画

○アンケートだけではなく, テリトリー卓球や後ろ飛び選手権など, 身体を動かし気軽に参加できる企画を実施した。

3. 地域交流・連携・参画に関わる事業

(1)ユースまちづくりスタッフ「チーム街スタ」

○地元商店街, 企業, 学校, 近隣住民, 地域団体などに対しセンターの取り組みへの理解を深めた。

○七条通沿いにある商店街のイベント協力(サマーナイトフェスティバル)に加え, 新たに嶋原商店街のイベント(ビアストリート)やマップ作り(七条西大路物語)に協力した。

(2)しもせいネット(協力・共催事業)

○崇仁マガジンの発行:崇仁発信実行委員会が発行するフリーペーパーの発行に際し, 会議の進め方へのアドバイスや, 地元のお店への取材・記事作成などの協力をした。

○第42期Sリーグ:Sリーグ実行委員会(全72チーム・約1,000名が登録)が主催。市内最大級のバレーボールリーグ戦。青少年を含む市民に対し, 「する」だけでなく「運営する」スポーツの機会を提供した。

○ダンスレッスン「Swish Kid'S」:SWISHダンスファクトリーが主催。小中学生を対象にスポーツ機会を, 若手のインストラクターには指導の現場を提供した。

○レクリエーション・インストラクター養成講習会:京都府レクリエーション協会が主催。レクリエーションの資格取得に向けた機会を提供した。

(3)学習支援事業

①「らくさいスコール」(中学生学習支援受託事業)【再掲】

○洛西支所, 京都経済短期大学, 青少年の健全育成を考えるフォーラムと連携し, 洛西地域で毎週1回の学習会を運営した。

○中退予防の場として、高校に進学した者も継続して参加し、学習支援や高校生活の悩みを相談できる場となった。また、大学受験終了後、ボランティア見習いとして学習会に参加する者もいた。

②「下京学習会」(中学生学習支援受託事業)【再掲】

○下京区役所と連携し、毎週1回学習会を運営し、高校受験に向け、学習の習慣づけ、基礎学力の向上等を目標に、ボランティアスタッフと1対1で学習に取り組んだ。

○学習を通して、ボランティアスタッフとの関係性を築くことで、学習者の「居場所機能」にも繋がった。

4. 担い手育成に関わる事業

(1)しもせいチャレンジ☆キッズ

○「青少年ボランティアスタッフと子どもがスポーツ・レクリエーションを通して継続的に関わることで、互いに成長する」ことを目的に、年間6回のプログラムを実施した。

○ボランティア同士の不信感が高まっていたが、ワーカーの丁寧な介入により、問題意識を共有することで自分たちが中心となって運営していこうという意識が高まってきた。

(2)ワンデイボランティア

○初めてでも気軽に参加できる単発のボランティア活動の機会を提供した。

○ドッジボール大会への審判派遣、地域の祭りやイベントの運営補助・ブース出展・ステージ出演、京都マラソンの沿道整理など、スポーツ・レクリエーションに関連した様々な機会を提供することができた。

(3)プラン・ドゥ(自主活動促進の事業)

○若者の「やってみよう」を叶える企画を後押しし、相談や施設提供、広報などの協力を行った。

○龍谷シンフォニックバンド「ウィンターコンサート」:センター周辺地域に貢献したいという思いから、コンサート実施のサポートを行った。

5. 利用促進・発信・広報に関わる事業

(1)しもせい大学「学びほぐし学部」

○「ボードゲーム」、「コーヒー」をテーマに年2回実施した。2部構成にすることで、「哲学カフェ」での対話を効果的に進めることのできる人数を集客することができた。

○哲学カフェの手法を用いて、いくつかのルール設定のもと参加者が安心して話せる環境を提供した。他者の考えを受け止め、自分の価値観を捉え直し、受け入れようとする参加者の思いが伺えた。

(2)しもせいフェスタ

○「スポーツ・レクリエーション」をテーマにセンター利用者に活動発表の場を提供し、日ごろの練習の成果を発揮できるステージ発表やボランティア、育成団体による活動紹介ブースを実施した。

○旧センター周辺の商店の飲食物を販売したり、広告協賛金として寄付を集めたりすることで、地域との協力と認知度向上の機会につながった。

6. 相談・支援の取組

(1)あたまと身体でじっかんするプログラムⅡ(アジプロ下京)

○「事務作業」を通じた就労体験として、事前研修・体験実習(活動のふりかえり含む)・事後研修を組み合わせ実施した。

○全ての参加者が事業を通して就労意欲が高まり、次への具体的なステップを考えられるようになった。

(2)就業体験

○京都若者サポートステーションからの希望者に合わせて、年2回の受け入れを行った。参加者の体調やレベルに合わせて就業時間や仕事内容、相談など個別対応を行った。

(3)相談事業

○青少年に情報提供を行い、相談を受け、個別的な支援を行った。

○ロビープログラムの一環として、「何でも質問BOX」を設置し、年間で122件の投稿があった。

7. 少年非行の解決・軽減に向けた取り組み

(1)青少年支援ネットワーク

○「下京区行政推進会議」、「七条中学校学校運営協議会」、「下京中学校学校運営協議会」、「下京区はぐくみネットワーク」へ参加し、各機関との関係づくりを行った。

○積極的に外部へ足を運ぶ機会を増やし、協力依頼がある都度、青少年育成に結びつくよう理解を求めた。

○会議体でのつながり以外に、青少年に関係する団体と関係を深める取り組み(研修会など)には着手できなかった。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者の べ数	備考／実施場所等
スポーツ・レクリエーション事業				
トレーニングルームガイダンス	通年	26	160	アドバイザー52名を除く
筋トレ部	通年	130	407	登録者数26名
しもせい運動部	通年	5	19	下京地域体育館にて
居場所づくり支援事業				
しもせい道の駅／アンケート事業	通年	17	704	
しもせい道の駅／イベント企画	12月	1	23	「しもせい望年会」
しもせい道の駅／しもせいカフェ	通年	35	201	
地域交流・連携・参画に関わる事業				
ユース街づくりスタッフ ミーティング	通年	58	232	登録ボランティア数12名
ユース街づくりスタッフ イベント参加	通年	7	179	ボランティア含む
担い手育成に関わる事業				
しもせいチャレンジ☆キッズ	4月～3月	83	580	登録ボランティア25名/ボランティア, 定例ミーティング含む
ブラン・ドゥ	12月	3	130	「ウィンターコンサート」事前ミーティング含む
ワンデイボランティア	通年	20	897	来場者, ミーティング含む
しもせいネット／運営協力	8月25日 8月4日 8月25日 2月24日		16 16 17 975	「中央卸売市場夏祭り」出演 「楽市洛座夏まつり」出演 「下京・京都駅サマーフェスタ2018」出演 「下京つながりフェスタ」会場提供・ブース出展 ※来場者含む
しもせいネット／Swish Kid's(共催)	通年	46	251	SWISHダンスファクトリー主催
しもせいネット／Sリーグ(共催)	通年	28	6,475	Sリーグ運営委員会主催
しもせいネット／レクリエーション・インストラクター養成講習会(共催)	通年	5	70	京都府レクリエーション協会主催
利用促進・情報発信				
しもせい大学 学びほぐし学部	9月, 2月	7	46	講師, 事前打合せ含む
しもせいフェスタ	11月		468	ボランティア, 事前ミーティング含む
自習室	通年	315	2,989	
相談・支援				
ロビーでの情報提供	通年		122	「何でも質問BOX」
アジプロ下京	3月		47	参加者4名, 事前打合せ含む
就業体験	7月, 10月		19	体験者2名, 事前打合せ含む
学習支援事業「らくさいスコーレ」	通年	49	538	コーディネーター1名・ボランティア12名 登録・学習者26名登録
学習支援事業「下京学習会」	通年	54	542	ボランティア13名登録・学習者8名登録

Ⅲ-6. 南青少年活動センター

全体の動向

中高生と意識的に関わる時間を大事にできるよう、事業の整理を行った。加えて、50周年記念として利用者がより過ごしやすいセンターとなるよう、寄付事業の新設を行ったほか、式典の中でロビーワークの意味を捉え直し、職員一人ひとりが若者と関わることの重要性を再認識することができた。

1. 居場所づくり支援事業 ～たまってつながる居場所づくり～(センター固有テーマ)

(1) 若者誰もがのんびり過ごせる場づくり

①ロビー喫茶

- 昨年度の利用統計を元に、より利用者の多い火、木曜日に変更。利用者、ボランティア、ワーカーを交え豊かな雑談のある場をつくることができた。
- 月に1回、ロビー利用者(13～30歳まで)を対象にした食事プログラムを試行的に実施した。ロビーで過ごす社会人の参加も見られ、中高生との世代をこえた交流があった。
- 学生ボランティアの継続参加が集まらず、ボランティアによる安定した運営を行うことはできなかった。

②たまり場 project

- 昨年度から継続登録したボランティアが多く、少しずつ利用者と「顔見知り」の関係ができてきた。その結果、毎年恒例のイベントだけでなく、花火大会やロビーライブなど、新たな利用者「やりたい」気持ちを汲み取り、安心した居場所作り・イベントの運営ができた。

③フリータイム

- 毎日16～18時、卓球とダンスの利用であれば予約不要でスポーツルームを利用できる時間を設定した。
- 月に一度「卓球大会」を開催し、フリータイムを利用している若者同士が交流できる場を設けた。

④相談できる自習室

- 利用のない部屋を自習室として開放した。1回の利用毎にロビー喫茶で利用できる「ポイントカード」に押印するなど、センターを継続して利用してもらえるような仕組み作りを並行しておこなった。
- 自習室ポイントカード等を媒介に積極的に声掛けを行い、雑談から相談までできる関係性を築けた。また、フリータイムや喫茶事業、ロビーの利用につなげることができた。

(2) 誰かとつながるきっかけづくり

①ボランティア体験事業「ふらっとb」

- イベント運営を中心とした、1day ボランティアの場を設けた。青少年が参加しやすいよう時期を絞ったことで、高校生、大学生を中心とした応募が多数あった。
- 活動終了者には「ボランティア終了証」を渡すことで成果を具現化し、本人の活動意欲の向上に努めた。

(3) 若者同士が成長しあえる場づくり

①グループ活動体験事業「ひだまり部」

- 月2回、社会に馴染めなかった経験を持つ女性の少人数グループによる活動をおこなった。
- 長年継続して参加していた若者に生活環境の変化があり、継続して参加することが難しくなってきた。次年度に向け、グループ活動としての在り方や運営方法の検討が必要となっている。

②清掃活動「ひろいな」

- 月に1回、センター周辺の清掃活動を実施した。定例清掃に加え、外部の清掃イベントに参加したり、団体と共に清掃活動を行ったりと、清掃活動を通じた他者との交流の場もあわせてつくることができた。

③みなみ文化祭(旧:M×Mフェスタ)

- センターを利用している青少年グループが練習の成果を披露するステージ企画を実施した。
- 事前準備、当日運営は、高校生、大学生のボランティアが中心となって行った。

2. 地域交流・連携・参画に関わる事業

①地域連携事業

○南区行政推進委員会、はぐくみネットワーク、こころの健康を考える会など行政や地域団体の定例会議に出席し、南区の子ども若者の諸課題について、情報の交換や提案を行った。

②地域交流事業

○南区ふれあいまつり、洛陽・塔南、両児童館の夏祭り、地域一斉清掃などの取り組みに若者と参加した。

③南区ワカモノネットワーク

○東九条で活動している方と、塔南地区で活動している方をお招きし、南区内の違いを学ぶ機会をもった

○佛教、滋賀県立大学などにゲストスピーカーとして出向き、センターの実践を伝える機会をもった。

④育成委員会の実施

○6月に育成委員会(運営協力会)を実施。センター50周年に向けた取り組みとして、寄付事業の新設をご提案頂いた。協議の結果、利用者に還元できるよう、喫茶コーナーの改修のための寄付を募ることとした。

3. 担い手育成に関わる事業

①インターンシップ・実習生受け入れ

○立命館大学、京都女子大学、京都橘大学から、実習生・インターンシップ生を受け入れた。

②ボランティア育成

○「ふらっとb」など、1day ボランティアへの申し込みが多く、継続ボランティアに関しては参加が伸び悩んだ。

4. 利用促進・発信・広報に関わる事業

①広報

○季節ごとに「みなみだより」を発行し、塔南学区内の回覧板や、南区の中学校、高校(久世地域除く)の全生徒配布を行った。

②Webツールを用いた広報

○ホームページの他、ブログ、Twitter、Facebook などそれぞれの特徴を活かし、情報を届けたい対象ごとに情報を届ける取り組みを行った。

③南センター50周年企画

○センター設立50周年を記念した事業「ホームカミングデー」を開催した。かつての利用者から現在の利用者まで幅広い来館があり、今までセンターが担ってきた役割の理解を深めることができた。

○ロビー喫茶コーナーの改修のための寄付活動をおこなった。育成委員会に登録されている企業を中心に説明に回り、総額39.6万円の寄付を集めることができた。

5. 相談・支援の取組

①南中学生学習会(中学生学習支援受託事業)【再掲】

○グループ学習に取り組み、仲間と共に学びあう空間づくりを意識して運営を行った。

○新たに登録したボランティアの定期的な参加があり、少ないながらも安定した運営を行うことができた。

②社会的養護施設退所者等交流事業「いこいな」【再掲】

○月に1回、社会的養護を経験した若者が集まり、交流できる場を実施した。

○同じ経験を持つ当事者同士、交流を深める様子が見られたほか、本事業を通して社会的養護施設との交流も生まれた。

③セクシュアルヘルス事業

○バレンタインとホワイトデーの時期にあわせ、「レンアイカフェ」を実施した。また、「障がいのある若者に関わる支援者のための性教育講座」も参加した。

④相談支援事業

○ロビーや自習室利用の若者に対して相談活動を行い、進路や家族、友人関係などの話に耳を傾けた。

⑤就労体験事業「アジプロ」

○ロビー喫茶を利用して、調理から接客まで行う喫茶運営体験を実施した。仲間と協力して場をつくりあげることや失敗しても大丈夫ということに参加者に実感してもらう場を提供できた。

<行事一覧>

事業名	実施期間	回数	参加者／のべ数	実施場所等
ロビー喫茶	原則毎週火・木曜日	85	述べ696名	料理室
みんなで一緒に晩ごはん「ふらり亭」	第4火曜日	12	述べ88名	料理室
たまり場project	通年・随時	58	述べ1,020名	ロビー 他
自習室	通年・ほぼ毎日	282	述べ766名	和室
フリータイム	通年・ほぼ毎日	309	述べ3,530名	スポーツルーム
ボランティア体験事業「ふらっと」	7/28, 8/25, 11/11, 11/25, 12/22, 3/3, 3/24	7	述べ28名	南区関係機関等
グループ活動体験事業「ひだまり部」	原則毎月第1, 3土曜日	22	3名／述べ44名	南青少年活動センター
清掃活動ボランティア「ひろいな」	原則毎月第4土曜日 8/18	15	11名／述べ73名	センター周辺
みなみ文化祭(旧:M×Mフェスタ)	3/24	1	述べ266名	ロビー 他
フリーマーケット(同時開催)	3/24	1	述べ256名	スポーツルーム
南区ワカモノネットワーク	5/28, 6/28, 7/13, 10/29, 11/17, 2/24, 3/2, 3/17	8	述べ41名	大会議室, 他
育成委員会	6/25	1	17名	大会議室
実習生・インターン受け入れ	通年, 随時	30	5名／述べ39名	
ボランティア育成事業	通年, 随時	26	33名／述べ33名	ロビー
ホームカミングデー (南青少年活動センター50周年企画)	11/17	1	述べ366名	南青少年活動センター
中学生学習支援事業	原則, 毎週木曜日	49	17名／述べ407名	大会議室
退所者交流事業「いこいな」	毎月第3土曜日	12	10(内職員2)／述べ49名	料理室, 和室
就労体験事業「アジプロ」	7/24~8/16 11/16~12/6	14	6名	ロビー 他
ユース・アシスト	個別:9/6~3/7の内, 概ね毎週木曜日 交流会:12/16	24	34名／109名	中会議室, 多目的室, 料理室

Ⅲ-7. 伏見青少年活動センター

全体の動向

前年度からの多文化共生事業を中心とした事業の見直しがさらに進み、今後数年間の土台が構築されつつある。実際に、事業数は今年度より増加に転じており、昨年度比815名の増加であった。施設利用に関しても青少年のロビー利用が増え(+1,924名)、さらには一般の利用も増加(+759名)し、全体では4,291名の増加であった。来年度、事業、利用者数共に、如何に継続、発展させていくかが問われてくる。ネットワークの選択と集中、事業の質的な向上等、次の段階にすすめたい。

1. 多文化共生事業(センター固有テーマ事業)

①JTL(Japanese Talking Lesson)

○外国にルーツを持つ方と日本人が気軽に多文化にふれあえる場として、日本語での日常会話の練習をツールとした交流会「Japanese Talking Lesson」を毎週火曜日に開催。フリートークを通じて、参加者、青少年ボランティアの国際理解につながった。

②にほんご教室

○毎週木曜日は北青少年活動センター、毎週土曜日は伏見青少年活動センターにて実施。日本の青少年が外国にルーツを持つ方に対して日本語を教えながら多文化理解を深めた。北青少年活動センターでの教室は、ボランティアと学習者が十分に集まらず、12月をもって終了とした。学習者について、技能実習生からの問い合わせが多数寄せられたが、センターとして今後どのように対応すべきか検討していかねばならない。

③インターナショナルイベントクラブ

○日本人、及び外国にルーツを持つ青少年が一緒になって、月に2回ミーティングを重ねながら、伏見の名所を訪れるなどのイベントを2ヶ月に1回のペースで実施。事前の会議から、青少年の多文化理解につながった。

④他団体連携

○渡日・帰国青少年のための京都連絡会(ときめき)、京都にほんご Rings、多文化支援ネットワーク等、多文化共生に関連した委員会、有識者会議へ参画した。その他、NGOなどと連携し、国際×キャリアをテーマに「国際協力トークキングカフェ」を2回開催。ネットワークの構築だけでなく、具体的な活動に結びついている。

⑤カンボジア・スタディ・ツアー2018(自主事業)

○NPO 法人テラ・ルネッサンスと協働して、青少年を対象に企画実施。今年度は、現地の青少年との交流を主眼に置いたプログラムを現地スタッフと構築していたが、参加者が最小催行数に届かず中止とした。金額と時期について再考が必要である。

2. 居場所づくり支援事業

①ロビーアクション

○ロビーワークの活性化に向けて、ロビー日誌の作成、情報共有のための時間の確保等を密に行った。ロビーにて、ユースワーカー紹介掲示を行い、職員が身近な存在であることを若者へアピールした。その他、多文化なルーツを持つ大学生年代の青少年と3on3バスケットボール大会を開催。企画立上の段階からイベント実施まで、若者とともに行った。その他、中国人留学生のインターン生によるたこ焼きイベントなどを通して、多くの中高生とロビーで交流できた。

②向島子ども・若者のための拠点づくりプロジェクト

○伏見区社会福祉協議会、京都文教大学、地域住民・団体と連携し、向島ニュータウン内にあるコミュニティ・スペース「マイタウン向島(愛称 MJ)」にて、高校生年代から30歳までの青少年を対象とした居場所プログラム「向島ユースセンター」を運営。今年度より、毎週金曜日の運営、と実施頻度を高くしており(昨年度月1回)、青少年との関係構築や地域理解がさらに進んでいる。

3. 地域交流・連携・参画に関わる事業

①つながりカフェ

○青少年、一般市民の持込み企画によるイベント、コミュニティカフェ、ギャラリー展示(つな画廊)を展開。イベントの主催や参加、飲食出店を通して、青少年のチャレンジする場として機能しただけでなく、青少年と市民がふれあう機会となった。

②ふしみん祭り

○伏見青少年活動センターに集まるすべての人(ボランティアスタッフ、育成団体、関係団体・個人)、資源が一堂に会するお祭り「ふしみん祭り」を開催。活動成果の発表の場はもちろん、地域と青少年等、それぞれのつながりを新たに紡ぐ場に、さらにはセンターの活動内容・意義を発信することができた場であった。初年度であったが、ボランティアスタッフ、出展者、来場者ともに非常に満足度が高く、意義のあるイベントであった。

4. 担い手育成に関わる事業

①ボランティア・ラーニング

○ボランティア説明会やインターン・実習生の受け入れ、ボランティア同士の交流会を行った。活動の入り口になるだけでなく、多様な出逢いを通して、それぞれの活動をより豊かにすることにつながっている。

②ワンアアップ(ユースサポートプロジェクト)

○ダブルダッチ教室(MIYAKO JUMP ROPE CLUB)のサポートをおこなった。

5. 利用促進・発信・広報に関わる事業

①Youth Diary@伏見

○今年度より発行開始。夏号・秋号・冬号・春号と4回発行。自習室やフリータイムなどの施設利用方法の説明・センターを利用する青少年や育成団体を紹介した。また事業・イベントの告知や成果報告とともに、ユースサービス協会およびユースワーカーの仕事を紹介し、センターはただの貸館施設ではなく、ユースワーカーのいる場所であるという認識を若者が持てるように目指した。

②フリータイム・自習室・ロビーパソコンの設置

○平日15時～18時にスポーツルームAを、火・木・土・日・祝日15時～18時に中会議室ABをダンスができるフリータイムとして開放した。

○専用自習室の他に複数人で教え合いながら勉強できるグループ自習室を設置した。

○ロビーに100円40分で使えるパソコンを設置した。

6. 相談・支援の取組

①相談・情報提供事業

○相談情報提供116件130回と、前年度比較12件8回マイナスとなった。内、青少年の件数は76件87回。

②サポートステーション職業体験事業

○事務体験として1名受入。パソコンでのデータ入力に従事した他、段階を追って、継続した出勤を目指した。

③伏見学習会(中学生学習支援受託事業)【再掲】

○対象世帯の青少年に毎週木曜日(長期休み期間は毎週2回)学習支援活動(愛称:STEP)を実施。中学校3年生の登録者10名中9名が高校へ進学した。

○一昨年度10月より、向島ニュータウン藤の木エリアにある城南保育園にて学習会(愛称:向島ふらす)を開設。毎週土曜日に実施している。中学校3年生の登録者3名中1名が高校へ進学、残り2名は、連絡がとれないため不明である。

○伏見区担当課、及びケースワーカーを対象に活動内容についての研修会と意見交換を実施した。

7. 地域連携事業

①地域連携事業

○伏見青少年活動センター運営協力会、伏見区本所地域子どもネットワーク、伏見西はぐくみネットワーク等、行政・地域団体などの定例会議に出席し、伏見区の子ども・若者の諸課題について、提案や情報交換を行った。

<行事一覧>

事業名		実施期間	回数	参加者／のべ数	実施場所等
□多文化共生事業					
JTL(Japanese Talking Lesson)		通年	35	31(275)	内ボランティア延べ157名, 登録18名
にほんご教室	伏見 土曜クラス	通年	37	21(381)	内ボランティア延べ221名, 登録30名
	北 木曜クラス	4月～12月	28	9(97)	内ボランティア延べ44名 登録2名
インターナショナルイベントクラブ		通年	20	55(104)	内ボランティア延べ46名 登録8名
他団体連携		通年	8	(206)	
カンボジア・スタディ・ツアー2018		中止	0	—	
□居場所づくり支援事業					
ロビーアクション		通年	66	720(721)	内ボランティア延べ1名 登録1名
向島子ども・若者のための 拠点づくりプロジェクト		5月～3月	40	27(184)	内ボランティア延べ40名 登録3名
□地域交流・連携・参画に関わる事業					
つながりcafe	カフェ・イベント企画	通年	19	(1155)	
	つな画廊	9～11月	21	(1136)	
	縁庭	通年	79	(84)	
	CAFEおせっかい	6月～3月	9	(288)	内ボランティア延べ5名
ふしみん祭り2018		12月	5	1142(1165)	内ボランティア延べ23名 登録23名。
□担い手育成に関わる事業					
ボランティア・ ラーニング	ボランティア研修	12月	1	7(7)	内ボランティア延べ6名 講師1名
	ボランティア説明会	6月～7月	4	15(15)	
	ノーバディーズパーフェクト	7～9月, 3月	14	10(281)	内ボランティア延べ46名 登録15名
ワンアップ		随時	42	(262)	
□利用促進・発信・広報に関わる事業					
フリータイム・自習室 ロビーPCの設置	フリータイム	通年	285	(4, 171)	
	自習室	通年	304	(6, 027)	
Youth Diary@伏見		8～9月	3	(3)	内ボランティア延べ1名 登録1名
□相談・支援の取組					
相談・情報提供事業		通年	130	116(130)	内相談68件 情報提供48件
サポートステーション職業体験事業		未実施	0	—	
中学生学習支援事業	STEP	通年	51	17(635)	内ボランティア延べ349名, 登録19名 学習者登録28名
	向島ぶらす	5月～3月	40	13(278)	内ボランティア延べ99名 登録11名 学習者登録15名
□地域連携事業					
地域連携事業		通年	1	14(14)	関係機関に出席および運営協力会の実施

IV. 収益事業等(青少年活動センターの青少年以外の利用)

京都市を中心として活動する市民団体や地域団体、企業等に青少年活動センターを利用をいただいた。

年間一般利用者数(7センター合計) 56,208人